

イタリアの歴史

倉田 稔

はじめに

本書は、イタリアの歴史についてかつて書いたものをまとめたもので、以下の物を収録した。

「イタリア、そしてミラノ」(『言語センター広報』24号, 2016年1月)、の一部

「小樽のヴェネチア美術館, ヴェネチア」(『らぶおたる』2014年11月)、の一部

「ヴェルディのエルナーニ」(『言語センター広報』8号 2000年)

「ナポリ」(『言語センター広報』27号) 2019年、の後半

「ルネッサンスの遠因とフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェラ寺院」(『人文研究』138・9輯, 2020年3月)

目次

はじめに

イタリア中世の成り立ち

ゲルマン緒民族

ルネッサンスの遠因とフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェラ寺院

ヴェルディとオペラ「エルナーニ」

ミラノの歴史

ヴェネチアの歴史

フィレンツェの歴史

ナポリ政治史

イタリア中世の成り立ち

イタリアは、古代ローマ帝国の支柱であった。

中世のヨーロッパはゲルマン民族の国々になる。

ゲルマン民族は初め北欧や北ドイツに住んでいた。ゲルマン人のテウトニ族とキンペリ族が紀元前 110 年にドイツに侵入し、南ガリアまで来た。それがローマ帝国のマリウスに討たれた、という経緯もある。その後、ゲルマン人は南下し、大陸先住民ケルト人を圧迫し、同化させた。紀元前 1 世紀には、ローマ帝国と接するようになった。

ゲルマン民族は、農業、牧畜、狩猟の民だった。紀元前 1 世紀に飢饉に陥った。ゴート族はバルト海を船で渡った、という伝説があるが、実際は東北ドイツに住んでいた。かれらは武装難民になった。まずグダニスクへ行った。ゴート族はローマ帝国の強敵の 1 つになった。332 年コンスタンチヌス大帝 (272-337) は西ゴート族と協定を結んだ事もある。ゴート族はその後、グダニスクを出て、ドニエプル川に達し、キエフに来た。その南ロシアに 360 年頃王国を作った。ゴートはドニエプル川をはさんで 2 つの民族に分かれていた、東ゴートと西ゴートである。ここにフン族がやってきた。

ゲルマン民族は 375 年から民族大移動を始めた。その理由は、人口増とそれに見合う耕地の不足であり、また東方からフン族が侵略してきたからである。フン族は、匈奴の一派らしい。北アジアの遊牧騎馬民族で、中央アジアのステップ地帯の出、らしい。フン族は実際にはまず、東ローマ帝国領内を荒らし回った。東ゴート族、西ゴート族を圧迫し、そこでゲルマン民族大移動を誘発した。

375 年前後に大事件にあったわけだ。フン族がアラニ族を従えて、東ゴートに攻め込んだ。ゴートの当時の大王はエルマナリクで、抵抗したが、自殺した。彼は、後に出るテオドリックの先祖だっ

た。東ゴートはフン族の遊撃戦に負けた。東ゴートは独立国家ではなくなった。フン王はバラルヘムで、エルマナリクの孫を妻にした。東ゴートはフン族に組み込まれた。東ゴートは滅亡直後 385 年に、東ローマ帝国領に移住させてくれと懇願したが、殲滅された。404 年にドナウからイタリアに侵入し、しかしローマ帝国のスティリコに敗れる。

西ゴートは東ローマ帝国に搾取された。

フン族が東ゴート民族を征服したので、375 年以降、これを恐れた西ゴート族が南下した。西ゴートは 378 年、アドリアノポリスで、ローマ軍と戦う。勝つが、妥協してしまった。

フン族は 5 世紀中頃、つまり大民族移動が始まって後、アッティラの時代に統一帝国を造った。フン族の大王アッティラは、兄ブレダと共に王位についたが、兄が病死し、あるいは兄を殺し、434 - 453 年まで王位にあった。パンノニア（今のハンガリー）に王国を作り、451 年に西ローマ帝国のガリアに侵入し、北イタリア、またミラノにも侵入した。しかし同 451 年、カタラウヌムの戦いで負け、パンノニアに戻った。だがアッティラは、東西ローマ相手に戦い、戦利品と貢ぎをえた。アッティラはフン族の定住を目指した。

西ローマ皇帝ヴァレンティアヌス 3 世の姉にホノリアがいた。宮廷には宦官だけだった。宦官になるには手術をして命を落とす方が多かった。かれらはしかし出世することができた。彼女はその状況の中で、勿論宦官ではない侍従エウゲニウスの子を産んだ。母は呆れ驚き、ビザンチンに追放した。このホノリアがアッティラの存在に恋した。アッティラは、ホノリアが不遇であるという理由を作って、西ローマ帝国を攻めた。アエティウスが、西ローマと西ゴートの連合軍で迎え撃った。シャロン・シュール・マルヌの戦いであった。西ゴート王が戦場で事故死した。451 年夏、西ゴートは撤退し、フンも撤退し、ハンガリーへ戻った。その後、フン族は 452 年にイタリア遠征をし、北イタリアを占領した。教

会がアッティラを説得し、手を引かせた。

これをきっかけにして、イタリア北部のヴェネート人はヴェネチアの島々に逃げ込むのだった。

アッチラは東ローマを攻撃すると言って、脅迫した、だが、この大王は 453 年に病死した。結婚式の直後だった。フン族は多妻制だった。東ローマのプリスクスが使節としてきたので、アッティラについて少し記録を残した。アッチラの本名は伝わっていない。アッティラは、おやじという意味である。

フン王国は後に、ゲビート族の王アルタリックによって崩壊する。

ゲルマン民族の移動によって、ローマ帝国が倒れたのだが、イタリアについて言えば、初めに、ゲルマン民族の 1 つ、東ゴート民族がイタリアに侵入した。東ゴート族(1)は、最初にフン族の侵入によって大打撃を受けた民族で、英雄テオドリック (454 - 526) により、フン族の支配を抜け出た。テオドリックは、東ゴート王国創始者で、東ゴート族の王子の子であった。東ローマ帝国の人質としてコンスタンチノポリスの宮廷で過ごした。父が 470 年に王位に就くと、帰国し、叔父の領土を継いだ。父の死後、王位についた。486 年に東ローマ帝国の軍事長官に任命された。

一方、ゲルマン人オドアケルは、ほぼ 430 年の生まれで、スキル族出身であり、首長の次男であった。彼は西ローマ皇帝の親衛隊に入った。そして西ローマ帝国で貴族 (パトリキ) になった。このころからゲルマン人が皇帝を決めるようになった。

アッチラの秘書だったオレステスが西ローマ帝国に入り、出世し、謀反し、475 年、息子ロムルスを皇帝にした。

5 世紀に西ゴートとヴァンダル族がローマを略奪した。そこで西ローマ帝国は首都がミラノへ移り、404 年にラヴェンナへ移った。

オドアケルは 476 年にイタリア在住ゲルマン人の王に選ばれ、オレステスを襲い、ロムルスを退位させた。こうして 476 年に帝国を倒した。彼は王国をつくったが、東ローマ帝国の内政に干渉

したので、東ローマ帝国の皇帝ゼノンは、テオドリックにイタリア遠征をさせた。テオドリックは 489 年、リュブリアーナでオドアケル軍を破り、ヴェローナで再びオドアケルを破り、ミラノを占領した。オドアケルは、首都になっていたラヴェンナに退き、492 年、テオドリックはラヴェンナを封鎖した。ラヴェンナの司教が両者を仲介し、テオドリックは、493 年、ラヴェンナに入城した。彼はオドアケルを食事に誘い、だまし討ちにした。493 年、テオドリックはイタリア王を名乗った。ただし東の皇帝はやっと 497 年に認めたのだが。テオドリックはアリウス派（注）であった。そしてラヴェンナを首都とした。こうして東ゴート民族は、イタリアに 493 から 555 年まで国を造った。東ゴート国は東ローマ帝国の承認を受け、イタリアを領土とした。テオドリックには跡継ぎの男子がいなかったので、娘アマラスウィンタに婿・エウタリックを迎えたが、彼は急死した。そこで孫のアタラリックを世継ぎと決め、その母アマラスウィンタが摂政になった。アタラリックも病死し、アマラスウィンタが女王になった。ここでテオダハトがクーデタを起こし、535 年にアマラスウィンタも重臣たちに殺された。これで東ローマ帝国は東ゴート攻撃の口実にした。まずダルマチアを落とし、シチリアを降伏させ、最後にテオダハトは暗殺される。ウィティギス将軍が東ゴートで王に選ばれた。東ローマはこの王位交代を承認したが、戦いは行われ、540 年にラヴェンナを占領した。新王トティラが出たが敗戦死し、その後、テヤが出たが、敗北する。こうして、東ローマ帝国またの名ビザンツ帝国に滅ばされた。かのユスティニアヌス皇帝（483-565）によってである。

（注）キリストは神で、かつ人間である、とするキリスト教。

東ローマ帝国ではユスティヌスが皇帝になっていたが、甥のユスティニアヌスが彼のもとで出世した。皇帝が 527 年に没したの

で、ユスティニアヌスが皇帝になった、彼は、女優・売春婦テオドラ（497 年生まれ）と結婚した。(2)ニケの乱が起きて、皇帝は逃亡しようとしたが、テオドラが、反対し、いさめた。ユスティニアヌスは大遠征をし、東ローマ帝国を広大な国に仕上げた。その際、ヴァンダル族（北アフリカ）も攻め落とす。

その後、ゲルマン民族の一つであるランゴバルト民族が 488 年ころ、ドナウの北方に現れた。ユスティニアヌス皇帝（東）は彼らにパannoniaを与えた。彼らはユスティニアヌス大帝に協力し、東ゴート族を滅ぼす。しかし大帝の死後、568 年にランゴバルトのアルポイン王は北イタリアに侵入した。ミラノを占領し王国をたてた。そして、東ローマ帝国を追い出し、568 から 774 年に国を造った。別名ロンバルド王国という。これにより、イタリアの古代が終わり、中世になった、とも言われる。ちなみに、これで、ヴェネチアの島々に逃れて住んだヴェネチア人が海の上にヴェネチア島を作って住むようになる。ランゴバルト国は、後にフランク王国のカール大帝（742-814）に滅ぼされる。ロンバルディアと言う地名は、このランゴバルトの名から来た。

(1) 松谷健二『東ゴート興亡史』白水社。

(2) 橋川・村田「プロコピオス『秘史』一―翻訳と注
(1)」(『早稲田高等研究所』5号)

ゲルマン諸民族

東ゴート以外に、民族移動をしたゲルマン民族は次の通りである。

西ゴート族は、民族移動のきっかけを作った民族だが、移動を 375 年に開始し、378 年にアドリアノーブルの戦いでローマ軍に勝ち、ダキアを経て、ローマ領内に居住した。西ゴート族は 5 世紀初、イタリア半島に侵入したが、ガリアに向かった。415 年に南フラン

ス、トゥールーズで建国した。711 年まで王国が続いた。507 年にクローヴィスのフランク王国に負け、イベリア半島に移った。西ローマ帝国が 476 年に滅びると、エウリック王は、6 世紀に、フランス中部からイベリア半島南部・中部まで領土を広げた。621 年にイベリア半島全域を支配した。711 年にウマイア朝（イスラーム帝国）に滅ぼされるまで、続いた。

ヴァンダル族は、ゲルマン民族とされていたが、スラブ系またはイリュリア系と考えられるようになった。ガイリックが王になり、429 年ジブラルタルを渡り、カルタゴに向かい、439 年に占領し、ヴァンダル王国を北アフリカに、429 - 634 年まで作った。いわば北アフリカを強奪した。その王ゲイゼリックは 445 年にローマを 2 週間略奪した。シチリア、サルデニア、コルシカ、バレアス諸島を征服した。455 年にローマを占領したことがある。ビザンツ帝国のユスティニアヌスに 534 年に滅ぼされるまで続いた。

ブルグント族は、スカンジナビアに住んでいた。ホーンホルム島にいた。民族移動で、ライン谷に定住した。その後、サヴォイ地方に移った。ガリアを中心に、443 - 534 年まで国を作った。493 年、クローヴィスは、ブルグント王女クロティルダと結婚し、彼女はクローヴィスをカトリックに改宗させた。534 年、フランク王国に滅ぼされた。

アングロ・サクソン民族は、ブリタニア（現在のイングランド）に 449 - 829 年まで国を造り、初代イングランド王エグバート（在位 825 - 834）の登場まで続いた。

フランク人は西ゲルマンの一部族であった。これが次に王国を作った。

フランク王国は、ガリア北部、今のフランスを中心に 481 から 848 年まで続いた王国である。クローヴィス（在位 481-511）がメロヴィンガー王朝を開き、496 年に彼はアリウス派からアタナシウス派に改宗した。いわゆるカトリックにである。王国は徐々に

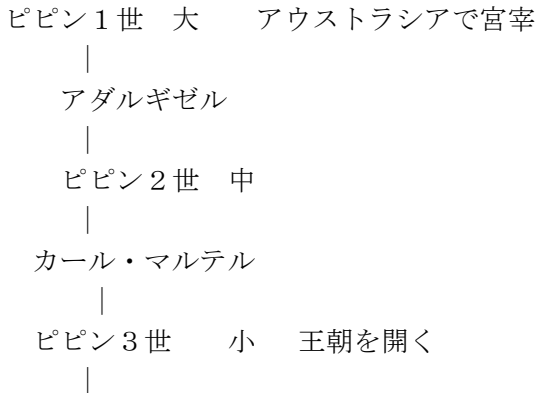
拡大し、しかしその後分裂して、王朝は 751 年まで続いた。メロヴィンガー王朝時代に、各地方の宮宰が力をもつようになり、8 世紀にカロリング家が宮宰を世襲するようになった。

732 年にイベリア半島からウマイヤ朝の軍がフランク国に迫った。宮宰カール・マルテル (686-741) がこれを撃退する。カール・マルテルの子、小ピピン (714-768、ピピン 3 世,) が、751 年にカロリング朝を創立した。ローマ教会とフランク王国が接近する。

756 年、小ピピンがランゴバルト族を攻撃し、北イタリアを獲得した。その一部を教会に寄進した。教会領はその後拡大して、中部イタリアをなし、これでイタリアは将来に亘り 三つの部分に分けられてしまうのだった。

小ピピンの死後、その子カール (742-814) が王となり、ザクセン人、ランゴバルト人、スラブ人、アヴァール人を征服し、大国になる。彼はローマ教皇から戴冠され、大帝と呼ばれる。没後、843 年のヴェルダン条約で、このヨーロッパ地方は三分割され、870 年の再分割で、ドイツ、フランス、イタリアの原型ができる。

カロリング朝の系図はこうである。



カール1世 大帝

|

ルードヴィヒ1世

|

|

ロタール1世

|

シャルル2世

|

ルートヴィヒ2世

イタリアでは、875年にカロリング家が断絶してから、幾つかの都市国家が自立し始める、同時に他民族が侵入してくる。

参考。エドワード・ギボン『ローマ帝国衰亡史』ちくま学術文庫。

オーギュスタン・ティエリ『メロヴィング王朝史話』上下、岩波文庫。

イタリア・ルネサンスの遠因と サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院

目次

はじめに ルネサンス 12世紀ルネサンス エメラルド・タブレット イタリアのルネサンス文学 東西教会の合同の試み サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院 フィレンツェ メディチ家 コジモ・ディ・メディチ、いわゆる老コジモ ルネサンス学問の開始 『ヘルメス文書』 まとめ

はじめに

フィレンツェで花開いたルネサンスの遠因として2つある。1つは、12世紀ルネサンスであり、他の1つは、失敗に終わったが、東西教会の統一の試みである。

ルネサンス

14世紀初から16世紀末までが有名なルネサンスで、文芸が発展した。(1)フィレンツェ、ヴェネチア、ミラノが、2世紀の間に文化都市になった。フィレンツェでメディチ家が支配し、ルネサンスが起きた。学者フィチーノ、ジョットの絵、アルノルフォ(2)の建築、ダンテの詩、ペトラルカの博識、ボッカチオの小説、ボッティチェリと三大芸術家が有名である。ただしジョットはルネサンス人ではない。

コンスタンチノーブルがトルコ軍に落とされ、ビザンチンから逃げた学者がルネサンスの種を蒔いた。教皇もルネサンス芸術家を保護した。

写実主義も、中世末期とルネサンスとは違う。中世末期にも微細な写実をしていた。だがルネサンスでは、理想主義の写実だった。

中世後期では、キリスト教＋アリストテレス＋ラテン語が文化であった。だが近世にルネサンスがやってくると、ギリシャ文化とローマ文化が復古され、母国語、フマニズム (humanism) が重くなった。創造主 対 被造物 (人間) の関係が変わった。ルネサンスの人々は、ギリシャ語を学び、アリストテレス (Aristoteles) だけでなく、プラトン (Platon) が学ばれた。

アリストテレスは、キリスト教にとっては絶対であった。中世ではローマ教会は、バイブルが権威＝オーソリテイで、後期中世ではアリストテレス哲学がそれを助けていた。だが批判があらわれる。

ルネサンスの美術家は科学者をも兼ねた。肉体美を追求し、精

神の革命をした。古典文化＝人文主義を求めた。ちなみに古典作家は異教徒である。インテリは、中世ラテン語で生活し、文人は国際的だった。ここで自我の主張をした。これはイタリア都市市民の運動であった。彼らは、神に対して欠点が多いが、人間の理性、能力を正しく認め、主張しようとした。信仰だけでなく、自分の理性と意志で立とうとした。

新約聖書は本来ギリシャ語であった。当時はラテン語の聖書であった。ギリシャ語聖書を学んで、キリスト教聖書が間違っていることを発見し出した。そこから宗教改革が始まる。

一般の人は中世的生活をした。しかし煙突が作られる。教会が日常支配をし、僧侶が性的墮落をした。檀家の女性や尼さんを相手にである。

アラビア数字と計算、コンパス＝羅針儀が、ヨーロッパに入った。ルネサンスは、イタリア以外、さしあたり広まらない。活版印刷で人文主義が広まった。

中世では教会が絵画を注文し、キリスト教、主に新約聖書を題材にした。宮廷あるいは貴族が肖像画を注文した。絵は注文生産であった。人々は文盲であった。

ゲルマン文化に対してラテン文化がよみがえった。ゲルマン人がラテン語を学ぶうち、ローマ文化とつながる。ローマ帝国の首都はコンスタンチノーブルだった。だがカトリック世界ではイタリアが首都だった。

ルネサンスは単に古典復興ではない。都市の文化だった。地中海での交易で、西欧が、ビザンチン、イスラームと出会った。東方から学問と物産が来た。(ヴァザーリ『美術家列伝』)

中世ではカトリック教会が一大産業だった。だが海運業が出た。**Renaissance** という語はフランスの歴史家ミシュレが初めに彼の『フランス史』第七巻で、今と少し違う意味で使った。ルネサンス芸術は、後に、絵ではフランドル絵画へ影響を与える。

芸術家は、肉体美を追求し、精神の革命をした。古典文化＝人

人文主義を求めた。古典作家は異教徒である。インテリは、中世ラテン語で生活し、文人は国際的だった。ここで自我の主張をした。

ギリシャ語聖書を学んで、キリスト教聖書が間違っていることを発見しだした。そこから宗教改革が始まる。

町、業界、病は、守護神を持っている。例えば、サンタ・ルチアは目、サンタ・アンナは安産の守り神である。

ルネサンスは、イタリア以外、さしあたり広まらない。活版印刷で人文主義が広まった。

12世紀ルネサンス

東ローマ帝国（ビザンチン帝国）にギリシャ文化が伝わっており、公用語もギリシャ語になっていた。一方で、当時学問が最も盛んであったイスラーム帝国では、アラビア語で世界の学問が学ばれていた。12世紀のヨーロッパでそれらの学問の翻訳活動が活発となった。中心地は、シチリア王国の首都パレルモや、カステールリア王国の都市トレドであった。

アラビア語からラテン語への翻訳は、プトレマイオス『アルマゲスト』(3)、アリストテレスの幾つかの著作、アルキメデス、エウクレイデス、『コーラン』である。

ギリシャ語からラテン語への翻訳は、アリストテレス、プラトンの幾つか、ヒポクラテス、ガレノス(4)などである。

ラテン語に翻訳されることで、ヨーロッパの知識人はこれらを学ぶことが出来た。学問的には、12世紀にアベラールがスコラ哲学の基礎を作った。15世紀にイタリアで本格的なルネサンスが花開くのだが、それはこの12世紀ルネサンス(5)がある種の基礎になったが、その克服である。

古いルネサンスは、ヨーロッパで、3つの時期があり、1つは、カロリンガー・ルネサンスである。8－9世紀の、カール大帝の文芸復興である。特にイギリスの文化を学んだ。2つは、12世紀ル

ネサンスである。

12 世紀には、西欧世界がイスラム文明に出会った、アラビアの先進文明に接した。12 世紀は、ローマ法の復活、ゴシック建築の成立、ポリフォニー音楽の成立で特徴づけられる。12 世紀まで西欧は、ユークリッド、アルキメデス、プトレマイオス、ヒポクラテス、ガレノス、アリストテレスのほとんどを知らない。ギリシャの学問は西欧では途絶え、ビザンチンへ行き、アラビアに入る。

11 世紀に、コンスタンティヌス・アフリカヌスがアラビアの自然学書や医学書をラテン語に訳した。

12 世紀に、自然学者・医学者イブン・スイーナーの書をラテン語にし、西欧人はアラビア語、ギリシャ語を学び、翻訳した。例えば、ゲラルドやアデラードだ。アデラードは、ユークリッドの「原論」をアラビア語からラテン語に訳す。アラビア固有の学問も発達し、それらもラテン語訳される。

12 世紀ルネサンスに内在的要因は、1 封建制の確立、2 農業革命、3 商業の進展、4 大学の成立、6 知識人の誕生。外的要因は、ビザンチンとアラビアからの文化の流入である。

スペインでキリスト教とアラビア文化が交流する。都市ではトレド、他にパレルモ、ヴェネチア、ピサである。クレモナのゲラルドが、翻訳の巨人だ。シチリアはビザンチン領土だった。878 年からイスラム、1060 年以後ノルマンの支配であった。ここにギリシャ、ラテン、アラビアの文化が共存した。

ヴェネチアとピサはコンスタンチノーブルと通商し、ギリシャ文化を西に伝えた。ヴェネチアのジャコモがアリストテレスを翻訳した。

尊者ピエール (c.1054 - 1156) は、フランス人で、ベネディクト修道会士、クリュニー修道院長である。12 世紀 修道院はクリュニー派とシトー派が盛んだった。ピエールは「トレド集成」をつくり、『コーラン』を翻訳させた。これでイスラムの全体が分かる。

バースのアデラード (c.1080 – c.1150) は、南イングランドのバースうまれ、フランスで学ぶ、その後アラビアの新学問を志し、サレルノ、キリキア、シリア、パレスチナ、エルサレムで、7年間学ぶ。『自然の諸問題』を著す。多くのアラビア語の本をラテン語に翻訳し、それらはユークリッドの「原論」、アル・フクーンミーの「天文表」である、

これまでヨーロッパでは自然を神の摂理として見た。しかし自然それ自体を合理的に見ようとする新しい動きがでた。

12 世紀 フランス、シャルトルのベルナールは、司教座聖堂の付属学校で、自然学の研究を重視し、自由 7 科をおく。その後、学頭ティエリは、ベルナールの弟で、ギリシャ・ローマの大学者を扱う。ユークリッド、アリストテレス、ピタゴラス、プトレマイオス、などをである。つまり非キリスト教徒をである。科学と信仰は矛盾しないとする。

アレクサンドロスの東征以後、ヘレニズムが引きつがれる。アラビアにギリシャの高い水準の学問が入った。とりわけヘレニズム時代の学問だ。西ローマ帝国にギリシャ科学はほとんど入らず。東ローマ帝国がひきついた。

ヘレニズム科学は、5 – 7 世紀に、シリア語に訳された。ついでアラビア語に訳されて、アラビア文化圏に輸入された。8 – 9 世紀にギリシャ語から直接アラビア語に訳された。アラビア訳ヘレニズムがラテン訳されて西欧に入った。イスラム以前にアラビアで科学や哲学はなかった。

東ローマを追われたネストリウス派 (両性論) (6) が、西アジアにギリシャ文化を伝搬させた。これは 431 年のエフェソス会議で異端とされていた。ネストリウス派は、エジプトへ、ついで西アジアへ移り、エデッサを拠点に、シリア語で布教した。

457 年、東ローマ帝国のゼノン帝が学校を閉鎖し、彼らは迫害される。ササン朝ペルシャへ移住する。そして布教する。これは中国まで広がる。ギリシャ哲学の教化もする。ジューティ・シャー

プールに大研究所が建てられる。ユスティニアヌス帝がアテナイの学校を閉鎖したので、優秀な学者がここに来る。

異端の単性論者もギリシャの学問をアラビアに伝える。これは451年カルケドンで異端とされる。そしてビザンチンを追放される。

6世紀、ラシャイナのセルギオスが大学者で、シリア訳を多く作る。特にガレノスを訳した。他の大学者は、セヴェルス・セポフトである。シリア語のアラビア訳、ギリシャ語のアラビア訳、この2つで、アラビア・ルネッサンスが始まる。

サリー一族を滅ぼしたウマイア朝（スンニ派）が749年、倒され、アッバース朝（シーア派、ペルシャ人）ができる。ここはヘレニズムの伝統があった。首都をバグダッドにし、ジュディー・シャープールから多くが招かれる。815年、「智恵の館」をつくる。

翻訳の巨人は、1、フナイン・イブン・イスハークである。ヒーラフの出身で、ジュディー・シャープールの学校に入る。ビザンチンへ行き、ギリシャ文献を学ぶ。バズラからおよそ826年にバグダッドへきて、ガレノスの翻訳をする。フナインは、ネストリウス派のキリスト教徒だ。ついで、2、サービト・イブン・クッラである。ギリシャの異教徒である。

シリア・ヘレニズムは、5－7世紀、ビザンチンのギリシャ文明が中東地域一帯にシリア語に翻訳され伝達された文明移転だった。

アラビア・ルネッサンスは、8－9世紀、ギリシャの学術文明がバグダッドを中心にアラビア語化され、アラビア文明圏に伝達された復興された運動である。アラビア学術は11世紀に頂点に達する。ギリシャ文明に、バビロニア、オリエント（エジプト以来）、ペルシャ、インド、中国の文明をとりいれる。

12世紀、西欧で大翻訳時代がくる。アラビア語のギリシャ学術と、アラビアの学術が、大量にラテン語化される。カタルーニアは一時、イスラムの勢力圏に入った。

アラビア文化に同化したキリスト教徒のスペイン人（＝モサラ

べ) がでた。

12 世紀ルネッサンスは、スペインではカタルーニアのアラゴン派とトレド。イタリアではパレルモのシチリア派と、ヴェネチア・ピサの北イタリア派がでる。スペインの代表者はクレモナのゲラルドである、12 世紀以前の西洋は世界文明の辺境にあった。(7)

13 世紀に、アルベルトス・マグヌス、トマス・アクイナスが、スコラ哲学を作る。アリストテレスとキリスト教を結びつける。トマスはナポリ大学で学んだ。これはアラビアびいきのフリートリヒ 2 世(8) が建てた。ナポリは当時アラビア文明をうけ入れる前線基地だった。トマスは「対異教徒大全」を書く。ヨーロッパ思想の地盤を作り上げる。トマスは、A・マグヌスの弟子で、キリスト教とアリストテレスを統合した。パリ大学神学部にいた。

アリストテレスは初めアラビア語から、後にはギリシャ語からラテン語訳された。13 世紀にアラビア的に解釈されたアリストテレス、つまりアヴェロエス主義がはやる。

13 世紀、クロステスト、ロジャー・ベーコンがでる。R・ベーコンはアラビアのイブンヌルハイセムの光学を学ぶ。近代科学は 14 世紀のスコラ学者から始まった。

ユダヤ人がスペインから追放された、1492 年以後である。

エメラルド・タブレット

12 世紀のヨーロッパに出現したエメラルド・タブレットなるものがある。ヘルメスあるいはヘルメス・トリスメギストス(後述) が書いたと思われるもので、残っているのは短い文章である。錬金術の奥義が記されているとされるが、その碑本文本はない。6 - 8 世紀のアラビア語の作品で、9 世紀前半に作られたとされる文書がある、12 世紀にアラビア語からラテン語に訳された。

(参考) M・ドウリル『エメラルド・タブレット』龍王文庫。
苗村吉昭『エメラルド・タブレット』溍標
アトランティス人 トート『エメラルド・タブレット』M・ドリール編、霞ヶ関書房。

イタリアのルネッサンス文学

ダンテ・アリギエーリ

ダンテ・アリギエーリは、フィレンツェで 1265 年に生まれた。ギベリーニ党＝皇帝派と、小貴族や商工階級からなるグェルフィ党＝教皇派とがあった。ダンテ家は没落小貴族なのでグェルフィ党だった。5 才で母をなくし、妹がいた。父は再婚した。相手には子供が 2 人いた。12 才で父をなくす。

ダンテは 1289 年、カンパルディーノの戦いに参加した。アレツツォ中心のギベリーニ派に勝つ。フィレンツェはグェルフィ派のものになる。ギベリーニ党の名門の娘ベアトリーチェに二度会う、二度目は 1283 年であった。ベアトリーチェは、銀行家のフォルコ・ボルティナーリの娘で、ヴィア・ディ・ストーディに住んだ。シモーネ・デ・バルディに嫁ぎ、1290 年、25 歳で死んだ。ダンテの理想の女性であるというのは虚像である。当時、詩人は勝手に理想の女性を作った。それにベアトリーチェの家は豊かで、ダンテの家は豊かではないし、政敵である。

ダンテは 1295 年に結婚する。フィレンツェの委員になる。1298 年、百人委員の 1 人になる。フィレンツェ内でグェルフィ党は白派と黒派に分裂し、白派は富裕市民層、少数の貴族の代表＝教皇に批判的で、フィレンツェの自立をもとめ、黒派は民衆の支持＝教皇に好意的で結びつこうとし、封建貴族を支持した。1300 年、ダンテは市統領 6 人の 1 人になる。1301 年、ローマ特使に 3 人のうち 1 人になる。

1302 年、ダンテはローマにおり、フィレンツェから永久追放さ

れた。1302. 1, 27, 捕まったら焚刑とされた。黒派がフィレンツェで勝利し、ダンテは白派だったからである。その白派内部でも争いがあったが、ダンテ1人の道を行く。亡命する。アレツオへ、1303年にヴェローナへ、1308年トスカーナへ。1309年にルッカにいる。1310年ルッカを去る。1315年ヴェローナへ、1317年ラヴェンナ、1321年ラヴェンナで病死する。(9)

「神曲」でルネッサンス文学が始まった。まずイタリア語で書かれ、ギリシャ・ローマの文明を紹介したからである。

「神曲」で、ダンテはイタリア語（トスカナ地方語だが）を高級な語にした。これまで文学はラテン語で書かれていた。それに概して、ラテン語より母国語の方が微細で豊かな表現ができるし、より多くのイタリア人が読める利点がある。「神曲」は初め、タイトルは「コメディア」であって、後に「神・・」とつけられた。

この書は詩であり、ウェルギリウス(10)の「アエネイス」を導きにした。巨大な想像力と構想力で書かれた。ダンテの広い古典の知識にもどづいている。ギリシャ神話から多く持ってくる。

彼はキリスト教徒の立場から書いている。そのため、ギリシャ、ローマの人々は異教徒となってしまう、多くの有名な人々が地獄にいる。その他、多くはイタリア人が出ているが、当時の人は知っていたらう。

本書は三つの部からなる。地獄編、浄罪編、天堂編である。あるいは、地獄、煉獄、天国である。地獄、煉獄(11)、天国は、当時の人に最も関心あったらう。初めは地獄編であり、地獄では、ダンテはヴァージル（ウェルギリウス。ここではウェルギリオ）に案内される。煉獄の終わりから、ダンテはベアトリーチェに案内をして貰う。

後年、ボッティチェリがメディチ家のロレンツオの従弟ロレンツオ・ディ・フランチェスコに頼まれて挿絵を描く。ダンテのデスマスクはフィレンツェのヴェッキオ宮殿にある。(11)

ペトラルカ

フランチェスコ・ペトラルカは、アレッツオうまれ、ボローニア大学へ入学した。当時最高の大人文学者である。古典文学を研究し、試作した。聖職に就く。愛人ができ、こどもを2人つくる。しかしラウラが永遠の恋人だったが、これも詩的虚構である。『カンツォニエーレ』が代表作である。1341年、桂冠詩人となる。父の故郷フィレンツェへ行く。ちょうど「デカメロン」を書き始めたボッカチオがいて、2人は共鳴する。

住んでいたアヴィニオンを見限って、詩人はミラノへ行く、君主はヴィスコンティ家だ。ペトラルカはかつてミラノの領主で大司教ジョヴァンニ・ヴィスコンティを政治的に非難していたのに、彼の賓客になった。結局8年いた。ボッカチオは手紙で非難した。しかしペトラルカは無定見で、不偏不党とか、王宮嫌悪は、格好付けだった。

彼は、ラテン語で書かなければ優雅な作品にならない、と考えた。ギリシャ語講座を開く。「デカメロン」の1編を無償でラテン語に訳してやった。ボッカチオに、「デカメロン」をイタリア語でなく、ラテン語で書くべきだったと言う。彼はダンテの存在を知らなかった。ボッカチオと知り合って、教わった。1374年7月30日、70歳で死す。古典・古代の文化の研究をし、広めた点でルネッサンス人である。(12)イタリアの古典復興はペトラルカによる。

ボッカチオ

ジョヴァンニ・ボッカチオ(1313・1375)は、フィレンツェ近郊チェルタルドに1313年に生まれた。(13)

父ボッカチオ・ディ・ケリーノは、フィレンツェの近くの小町チェルタルド出身である。愛称はボッカチーノである。父はこの町の農家の出で、13世紀末に生まれた。彼は農業でなく商売をしたいと、兄弟とフィレンツェへ1312年に移住する。彼は両替商になった。父と兄弟は、パリに出て商売、つまり両替商をした。そし

て数年とどまった。

父は、あるパリ娘ジャンヌを口説き、1313年、子を産ませる。これがボッカチオである、とされる。そこで母親はパリ娘ジャンヌである、とされた。しかしそれはボッカチオの思い過ごしだろう。彼は、父がわが高貴な母を誘惑して捨てた憎いペテン師だと考えた。彼の母親は分からず、ジョアンナ未亡人か。

父は後にバルディ商会に雇われ、後に組合の参事になる。マルゲリータ・デ・マルドークと結婚した。マルゲリータは息子フランチェスコをうむ。ボッカチオは家庭教師につき、ダンテを読む。ボッカチオは7才で詩を書く。

13世紀末、グェルフィ党がフィレンツェの牙城であった。1260年、法王庁がアンジュー家のシャルル・ダンジュー（カルロ1世）をナポリで招いた。それでナポリもグェルフィ党の支柱になった。フィレンツェが金融でナポリを支えた。フィレンツェの大手金融業者、バルディ商会などが、ナポリへ来た。

1327年、父がバルディ商会の代理人としてナポリへ招かれる。一家は移る。父は、1327－8年にバルディ商会の代理者、1329年にロベール王の政庁使節、1332年にバルディ商会のパリ駐在員だった。たいへん裕福だった。

ボッカチオはナポリの場末、まずしいボジーリボ地区に住んでいた。ナポリの君主政体をボッカチオは好意的に見ていた。ボッカチオはバルディ商会支店で実務を習う。だが文学に没頭し、ダンテに憧れる。1329年、父はナポリのロベール王の助言者になる。ボッカチオに法律を学ばせる。彼はダンテの友人チーノと知り合う。多くの文人に紹介される。宮廷図書館に通う。ギリシャ語を勉強する。物語をおもしろおかしく語る、才気煥発だった。

ナポリで、ボッカチオ本人も父も、彼が商売に向いていないことがわかり、父はボッカチオに法律・教会法を学ばせる。1331－6年までであった。教会で採用してくれるだろうと父は思った。ボッカチオは著名人の社会を求めた。社交界に入った。画家ジョッ

トとも交わった。当時のナポリは素晴らしかった。ロベール王は身内を失い、後に孫娘ジョアンナ（ジャンヌ）が王になる。王は放蕩で、貴婦人らに子を産ませた。

ボッカチオは、ダンテの友人チーノと知り合う。多くの文人に紹介される。カルメータに会い、天文学を学ぶ。ジェノアの天文学者ネーグロにも会う。ロベルト（ロベール）1世の図書館係と会う、そして宮廷図書館に通った。

1336年3月30日 美女フィアンメッタがサン・ロレンツオ教会ナポリに現れる。多くの男性が彼女を賛美した。マリーア・ダクイーノという。貴族の娘で、ロベール王の臣下と結婚していた。ボッカチオはマリーアを教会で見て、恋をする。ナポリ王ロベルトの庶子だった、というのは仕組まれた伝説（ヴィルラーニ、p.18）だった。当時、女子修道院がサロンであり、ここでボッカチオは彼女に会う。そして当時の有名な恋愛小説について語り合った。彼女からこの話を俗語（つまりイタリア語）で書いてくれと言われ、「フィローコロ」を書いた。恋をして半年間ボッカチオは彼女に言い寄る。1336年に恋が成就した。ボッカチオは詩や歌を彼女に献じた。彼女は浮気であって、本気ではなかった。ボッカチオにお金がなくなり、縁がきれた。1339年、フィアンメッタとの決定的な破綻となった。悲嘆を和らげようと、古典の研究をし、それで『テーセウス』を書く。主人公はアテネの英雄である。これは後の有名詩人 ポリツアーノ、アリオスト、タッソーに影響した。

バルディ商会とペルツイ商会は、英のエドワード3世に融資し、それが返済されずに1339年に倒産した。それに政争が加わり、父はフェレンツエへ戻る。ボッカチオを遅れて故郷に呼びよせた。彼はマリーアを思い切れないまま、1348年、フィレンツエに帰った。1341年にペトラレルカがナポリに来るというのに。

1340年10月、ボッカチオはナポリを去ってフィレンツェへ戻った。ボッカチオにとってナポリは自由、勉学、恋愛の地で、フ

フィレンツェは商人共和国の実利的、係争好き、芸術にまだ無関心で民主主義の騒乱の地、だった。1341年1月にはフィレンツェに父子が住む。この時までには父は妻と子を病死で失っていた。ボッカチオだけ残った。

父は1341年、ピチェと再婚した。ボッカチオは1341 - 2年に恋をし、父親になる。父の子で、弟になるヤコボ（1343年生まれ）の後見人になる。

ボッカチオは非常に多くの作品を書く。『フィアンメッタ』が1343年初に書かれた。彼は十分に稼がない。父は援助を与え続けた。ボッカチオは秘書として2つのところに滞在した。ボッカチオは北イタリアを、文人として職探しをした。その間いくつか作品を書く。フィレンツェで前述の『テーセウス』を書いたわけである。ボッカチオは『アメート』を1341年に書く。フランスの影響から古典の影響が変わる。

1347年、ペストが襲った。コンスタンチノーブル、キプロス、シチリア、サルディニア、マジョルカ、その後マルセイユ、ヴェネチア、1348年に、アヴィニヨン、フィレンツェ、イギリス、1349年に北欧、その後、ロシアであった。ヨーロッパの人口1億のうち2千5百万が死んだ。人間関係も壊れる。病菌をばらまいているという噂で、ユダヤ人が殺された。菌を運ぶクマネズミは十字軍の船にのって東方からやってきた、あるいは荷物の間に混じた。

14世紀初、飢饉があった。森林伐採、都市人口の過密、生態系バランスの破壊、経済成長による環境破壊があった。1330年に、噴火、地震、暴風、イナゴの大群が起きた。13世紀は成長の世紀だったが、14世紀は危機の世紀だった。

ボッカチオはアルノ河畔の父の家に住み、フィレンツェとチェルタルドに住む。娘がフィレンツェで死んだ。1350年、父もペストで死ぬ。ボッカチオは新作を書き始める。「デカメロン」だ。

彼は1350年から役職につく、ロマーニアへの使節だ。ダンテの

娘ベアトリーチェは、ラヴェンナの修道院に住む。お金を届ける用事ができた。

ボッカチオはペトラルカを非常に敬愛した。彼がフィレンツェに来ることになった。ボッカチオは歓迎の詩一編を呈した。1350年10月半ば会う。ボッカチオとペトラルカは友人になる。ペトラルカはローマへ行き、帰りにまたフィレンツェに寄る。

1351年、ペトラルカをフィレンツェに呼ぶ計画がでる。ペトラルカの父の有罪判決を取り消し、財産没収を取り消し、遺産を採りにくるようにと、また学校をつくりその教授職を与えると。そこでボッカチオが1351年4月、ペトラルカの住むパドアへ交渉に行く。だがペトラルカはプロヴァンスへ行ってしまった。フィレンツェ支庁は怒り、ペトラルカの父の決定を取り消した。でもボッカチオはパドアでペトラルカと長い学問的な話をした。

その後、ボッカチオはチロルへ外交交渉に出かける。

ジャンヌと夫ルイ・ド・タラントの支配下のナポリで、家令ニコロ・アッチャイウオールは、その主君の宮廷に著名文人を集めようとした。ペトラルカ、ボッカチオ、に声を掛けた。が、ザノービ・ダ・ストラダだけが応じた。その後ボッカチオはナポリへ行く。

一方、ペトラルカはプロヴァンスをあとにし、ミラノに滞留した。

1351年、ボッカチオは、フィレンツェの市政に参加する。財務官になった。ボッカチオは庶子5人を持つ。娘ヴィオランテ（1348年生まれ）を亡くす。他の子も彼より先に死す。フィレンツェに大学を建てる計画に参加した。1360年、レオンツイオをギリシャ語教師に大学で採用させる。

1359年3－4月、ボッカチオはミラノのペトラルカ家に逗留した。決定的な影響を受ける。ペトラルカが「神曲」をもっていない、中身を知らない、きちんとよんだことがない、と知っておどろいた。そこで、その本を送った。ペトラルカの影響で古典注解

に向かう。ペトラルカは古典ギリシャ語をよく読めない。

1359 - 60 年、ギリシャ語ができるというピラトを、ボッカチオはうまくトスカナへ呼び寄せた。1362 年まで彼を、3 年近く自宅においた。あてにならないひとだったが、ホメーロスを原文で読めるようになる。「イーリアス」のギリシャ語原典をみつけたのだ。ホメーロスを翻訳させる。

ペトラルカは後に読んで、文学作品（つまりデカメロン）なら、ラテン語で書くべきだと言った。ボッカチオはラテン語を学ぶ。1360 年、聖職を得る。

1362 - 63 半年 ボッカチオはナポリに滞在する。ナポリから資料編纂官としてきてくれないかと言われ、10 月末 ナポリに向かう。ひどい扱いを受ける。商人カヴァルカンティと友になる。

ボッカチオはヴェネチアのペトラルカの元に行き、滞在す。ヴェネチアからチェルタルドへ帰る。

1362 年 5 月、ボッカチオはフィレンツェにいた。62 年 11 月から 63 年 4 月までナポリにいた。8 月までヴェネチアにいた。

1365 年夏、公職を引き受ける。法王向け使者になって、アヴィニオンへ行く。1357 年 11 月 - 1368 年 2 月、二回目の使節になる。

「神曲」を注釈する作業が、フィレンツェから法王庁に誓願された。ボッカチオが講義することになった。1373 年 10 月 23 日からほぼ毎日 12 月まで。教会で。11 月 18 日から 60 回。74 年初めまで、ほぼ毎日。しかし病と、学問の大衆化は誤りという動きで、やめる。彼はタキトスを初めて読む。中世を通じて忘れられていた。

1374 年 7 月、ペトラルカが死ぬ。1375 年 12 月 21 日、ボッカチオがチェルタルドの家で死す(14)。

Decamerone

ボッカチオは、個人の価値こそが唯一の高貴さであるとする、庶民であり続け、大貴族や高官の敵である。フィレンツェが庶民

の政府の下で高度の繁栄に達したことを誇る。傲慢、羨望、貪欲が、厄災を及ぼすとする。

「デカメロン」を 1349 - 51 年に書く。イタリア小説中最高傑作とされる。イタリア語散文の基礎になった。1353 年に書き終えた。「デカメロン」では性愛を肯定し、謳歌する。構成の先例は「アラビアン・ナイト」である。『フィローコロ』を発展させた。一部を完成前に発表した。

時代背景は、1347 - 49 年のペストで、イタリアと全ヨーロッパに広がった。48 年春のフィレンツェではとくにひどい。フィレンツェで 5 万人が死んだ。そのときボッカチオはフィレンツェにいなかった。

ナポリ時代の話を持ってきた。『デカメロン』の話は創作ではない。船乗り、商人、巡礼、十字軍兵士が外国から話をもってきた。

作者不詳の短編集『ノヴェリーノ』、古代の作家アブレイウス、同時代人の記録、『パンチャカンドラ』、「リディーアの喜劇」、民間・地方伝承、中世のラテン語編集本、フランスの文学的伝承、を利用した。

新しい人生観で元の話をも根本的に変えた。女性読者に気晴らしを与える。愛は尊敬すべき物で、性愛を謳歌した。悲恋も書く。実際にあった話を脚色した。僧侶、修道女院を愚弄した。当時の階級制がでていいる身分違いの恋の物語も。貴族と平民を差別している。話は、自分の体験、聞いたこと、ギリシャ・ローマの昔の文献から、である。

不幸な恋人たちの話がある。疑い深い夫に、妻が恋人を作ること肯定している。当時イタリアでは、代父、つまり子の名付け親は、その母と関係を持つてはいけないとされている。「神父や修道士やすべての聖職者たちが、どんなに私たちの心の誘惑者であるか・・・」（八日目第4話）を描いた。「デカメロン」が教会から断罪される内容であり、宗教人から「デカメロン」は悪書の代表と言われた。ボッカチオは悩む。「デカメロン」をまねてサケッ

ティが「ルネッサンス巷談集」(15)を書く。しかし「デカメロン」の方が艶がある。

彼の他の著は、『名士列伝』で、九冊、1355 - 1360年に編集した。そして『名婦列伝』(16)である。大作『異教の神々の系譜』全15巻、これはユーグ4世の依頼である。

東西教会の合同の試み

古代ローマ帝国の末期から帝国の東西は分離していた。同時にキリスト教が国教になった。ゲルマン民族の大移動で、ローマ帝国の西半分が倒れた。ゲルマン人たちは、キリスト教の激しい権力闘争の中で、徐々にカトリック化していった。ローマ帝国の東半分は独特のキリスト教が発展した。東方教会あるいはギリシャ正教である。1054年に東西教会は分裂した。大シズマという。ローマ教皇(西)と総主教(東)が互いに破門しあった。だがもともと東西の差は拡大していた。

ドイツのコンスタンツで、1414から1418年まで公会議(Council)が開かれ、3人の対立教皇の存在を廃止し、教会大分裂を終結させた。またウイクリフ(17)とその影響をうけたヤン・フス(18)を有罪とした。

コンスタンツ公会議の決定をうけて、教皇マルティヌス5世(19)は、公会議を開こうとしたが、果たせず、結局1431年にスイスのバーゼルで開くことができた。同教皇は病没し、エウゲニウス4世(20)が引き継いだ。開会はしたが、ほとんど参加者は集まらなかった。教皇は来なかった。公会議支持派と教皇支持派が争った。公会議はフス派(21)の問題にも一定の解決を見た。

だが、オスマン・トルコ(22)の興隆とその脅威から、同じキリスト教は合同するか、すくなくとも協力する必要があると思われ、合同の為の公会議が開かれることになった。それをどこで行うかで、1437年に決裂した。この分裂後、教皇らに反発してバーゼル

に残り対立教皇を選んだグループもいた、

公会議ははじめフェラーラで 1437 年から開かれた。だがコジモ・ディ・メディチの提案で、フィレンツェに移ることになった。彼は教皇領の会計主任をしていた。フィレンツェ会議が 1438 年に始まった。サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院で行われたのである。

このサンタ・マリア・ノヴェッラ会議の前後に、多くのギリシャからの知識人が来て、あるいは亡命した。この 1439 年のフィレンツェの公会議に、アロンソ・ボルジアもバレンシア司教区、アラゴン施設団代表として出席し、その際、ギリシャの総主教ヨハネス・ベッサリオンやジュリアーノ・チェザリーニ枢機卿は、統一と改革の旗手だった。アロンソもその名を挙げた、

サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院

サンタ・マリア・ノヴェッラ寺院は、10 世紀にあった。1094 年に建物奉納がされた。1279 年に教会の着工式があり、設計はドミニコ会士設計士らであった。1287 年、広場建設が命じられ、ドミニコ修道会に与えられた。ここで祭事や馬上槍試合が行われた。1357 年にこの壮大な建築が完成された。1420 年、この新しい教会の奉納が行われた。ゴシック様式の着想であった。(23)

コジモ・ディ・メディチがフィレンツェで会議を開かせ、面倒をみたのは、もちろんメディチ家を誇示するためであった。

有名な会議が行われてから、高名な芸術家の作品が寄せられた。15 世紀に、アルベルティが一部ルネサンス的ファサードをその上部につくった。ブルネレスキの「十字架上のキリスト」彫刻、ジョット「キリスト磔図」、マザッチョ「三位一体」、リッピ「ストロツィ家の礼拝堂」がある。

フィレンツェ

フィレンツェは、ローマ人が花の女神フローラにちなみ、フロレンティアと命名した。それ以来フィレンツェと言われる。

国家的な規模で近代を作ったのは、後のオランダやイングランドだが、都市の規模で近代を作ったのは、ヴェネチアやフィレンツェである。両都はジェノアと並んで、市民の都市となった。これらの都市は自由にお金儲けができる体制である。それにより、これらの都市は発展したのだった。

フィレンツェはトスカーナ地方にある。B.C.10 世紀、エトルリア人が集落を形成した。11 世紀にトスカナ有数の都市になる。12 世紀初め、自由都市=コムーネになる。自治権が確立した。1182 年前後、フィレンツェは自由都市として記録される (24) トスカーナで最も繁栄している町となり、13 世紀にヨーロッパで最も繁栄する。13 世紀にフィレンツェは毛織物工業で豊かになり、その富を建築に向けた。同業組合が基礎になった。大組合=アルテ・マジョーレ 32 が、小組合が 14 を作られた。織物業と両替商が力を持った。

フィレンツェは、13 世紀ころから工業で発展し、金融でも発展した。イタリアで、都市共和国、自治都市が発展した。フィレンツェでは 1300 年代から初期ルネッサンスが発達する。イタリアで豊かな農民と商人が生成した。戦争が続いた。冒険商人が登場した。都市が生まれ、領主の支配から離れる。

1250 年のフリートリヒ 2 世の死後、1250 年、富裕市民らが貴族たちに反抗し、コムーネの権力を握り、第一次平民政府を作る。貴族階級はギベッリーナ党、工場主や商人階級はグェルフィ党に入る。グェルフィはギッペリーナを追放した。しかしギッペリーナはグェルフィを 1260 年のモンタベルディで破る。それで第一次平民政府は壊れる。1268 年ホーエンシュタウフェン家がココッツォの戦いで敗北し、再びグェルフィ党が 1282 年に第二次平民政府を作った。

フィレンツェでは 12 から 13 世紀に自治共和国を作った。1283

ー 4 年に、貴族や豪族が政治的職務につけないという、「正義の協定」を作った。そこで商人や銀行家が政権を担った。フィレンツェは共和国だった。教皇国家やイタリア諸大国と戦った。フィレンツェでは資産は大商人・織元に集中していた。

諸党派ができ、1434 年、メディチを中心とする党派が勝ち残った。メディチ家は形式上は合法的な権力を独占した。同家は銀行業が主で、ヨーロッパ中に支店を持ち、ヨーロッパ全域の商業に携わり、大財閥になった。

5 万人の人口のうち 5 - 6 千人が交代で市の役職に就いた。人民大評議会があった。しかし大小アルテ（＝組合）のみの権限であった。この 2 つの組合が土地貴族と戦って勝ったのだった。13 世紀末にはこの 2 つの内部で争いが起きた。フィレンツェは同業組合国家であった。14 世紀中ば、3 千人が参政権を持った。

フィレンツェだけでイングランドの総生産を上回った。商人や銀行に力があつた。フィレンツェは、小切手、信用手形、担保、複式簿記を発明した。株式会社ができた。羊毛染色が重要な仕事だった。

市民は民主制に執着した。だが初めはアルピッツィ家が陰で支配していた。フィレンツェは 12 世紀以来の共和国で、15 世紀後半に花開いた。初期ルネサンス時代である。

教会分裂

教会大分裂という時期があつた。前述のローマ帝国の東西の分裂によって起きた教会分裂の方が大きい、しかし次の分裂も大分裂と言われる。

1309 年のクレメンス五世から教皇がアヴィニオンに移された。だがローマ帰還が望まれ、1377 年、グレゴリウス 11 世がローマに帰還した。しかし 1378 年に彼は病死した。またイタリア人とフランス人との枢機卿が対立し、ウルヴァヌス 6 世としてイタリア

人が選ばれる。しかし選挙がやり直され、クレメンス7世が選ばれた。ウルバヌス6世はそれを認めず、アヴィニヨンへもどった。こうして2人教皇となり、1378 から 1417 年まで2人教皇制が続いた。

表にすると、

ローマは、ウルバヌス6世 1378 - 89年

ボニファティウス9世 1389 - 1406年

インノケンティウス7世 1404 - 06年

アヴィニオンは、クレメンス7世 1376 - 94年

ベネディクトス13世 1394 - 1417年

それに加えて一時は公会議派の教皇が立てられ、それは、

アレクサンデル5世 1409 - 70年

ヨハネス23世 1410 - 15年 である。

1378 から 1417 年まで、複数の教皇がいた。最終的には マルティネス5世が統一教皇となった。この間、調停機関もなくなったので、百年戦争などが起きたのだった。

メディチ家

その後のフィレンツェの財閥は、メディチ家で、薬屋から銀行家になる。初め薬種商で、明晩を商って栄えた。14世紀に銀行家になった。メディチ家は、フィレンツェの銀行家・政治家で、後にトスカナ大公国の君主となる。ここでは後の話は略する。

メディチ家は、ボッチチェリ、レオナルド、ミケランジェロ、などのパトロンとなり、ルネサンスを育てた。

初めアヴェラルト・ディ・メディチ（・ 1383）が政治的略奪をもとに銀行を開いた。

その子ジョヴァンニ・ディ・ピッチ・デ・メディチ（1360 - 1429）が、銀行業で大成功した。彼は、銀行業で成功した親類のヴィエーリ・ディ・カンビオ（1323 - 1395）のもとで学んだ。そ

してローマ、ヴェニスに支店を置き、メディチ家の基礎を作った。スキャンダルの対立教皇ヨハネス 23 世を立てたから、ローマ教皇庁の財務管理者になった。この家は貿易業と金貸し業であった。14 世紀末に銀行を作った。教皇を得意先にして貸した。1421 年、ジョヴァンニ・メディチが「正義の旗手」＝総督に選ばれる。メディチ家は、大銀行家、新興成金であった。資本に 7% の税を課した。

コジモ・ディ・メディチ、いわゆる老コジモ

その子コジモ・デ・メディチ (1389-1464) は、蓄財をし、国際金融をし、市の実力者になる。政敵を倒し、フィレンツェの政治的実力者となった。彼は、造営事業をし、学芸を保護し、学芸・美術品を集めた。コジモ・イル・ヴェッキオ、つまり老コジモと呼ばれたコジモは、フィレンツェの政治的実権を握る。ヨーロッパに支店を出し、ヨーロッパ有数の大富豪になる。

コジモは古代の芸術品を集めた。サン・マルコ修道院の中庭に、ローマの彫刻があつめられている。そこに裸婦像があり、それは海から産まれたばかりのヴィーナスである。これをボッティチェリは絵画にする。「ヴィナスの生誕」である。

メディチ家は、芸術家・建築家を保護した。例えば、有名なボッティチェリ (c.1444-1510) やミケランジェロ (1475-1564) が集まる。ヴィーコ、フィチーノを保護した。コジモは、フィリポ・ブルネレスキやドナテッロを庇護した。彼は 66 万フロリンを町に投じて、寺院、病院、城塞、邸宅を建てさせた。彼は、蔵書を買取り、図書館に寄付した。フィレンツェの知識人はすべてコジモを敬愛した。

彼は、ローマ、アヴィニオン、ブリュージュに、メディチ銀行を開いて、フランス王、イギリス王、法王庁、ヨーロッパの諸侯、大貴族、商会、企業に、膨大な貨幣を貸し付けた。

老コジモは、政治・行政の前面に出ることはなかった。市政委員の1人にすぎなかった。しかし最高評議会の委員はみなメディチ家ゆかりの者か、友人であり、敵対者も、結婚、貸し付け、寄付で、メディチ家に引きつけられた。

彼はメディチ家別邸で饗宴をした。老コジモの悪口を言う人はいなかった。彼は腰が低く、謙虚だった。

1433年、ルナルド・アルピッツイのクーデタあるいは政治的陰謀で、コジモは1433年、逮捕され、処刑されることを追放となる。一時追放でヴェニスへ移った。だが、アルピッツイ家の失脚で、コジモが1年後1434年に帰還した。帰ってから、アルピッツイ家のリナルド、オルマンツォ、ステファノを絞首刑にした。

メディチ家の大番頭は、フランチェスコ・サセッティだった。コジモは、トスカナ最大の資本家だった。反乱を私財で鎮圧する。コジモ本人は市の要職につかなかった。しかし親類が全部フィレンツェで要職についた。累進所得税を世界最初に、課した。銀行もしっかり業務する。ヴァチカンの金融を独占した。

メディチ銀行は、ヴェネチアもナポリも支えた。イタリア4強を団結させた。このためルネサンスが生まれた。

コジモ・ディ・メディチは自派の権力が安定すると、市民の反感を避けるために、官職にはつかず、市民の歓心を買うために、公共事業に私費を投じた。14世紀にここでルネサンスが起きた。

一方、絹織物組合は棄て子育成院を援助した。建物はブルネレスキの作である。1425年、サン・ジョヴァンニ礼拝堂の「天国の扉」がギベルティに依頼された。コジモの庶子カルロは、枢機卿になる。

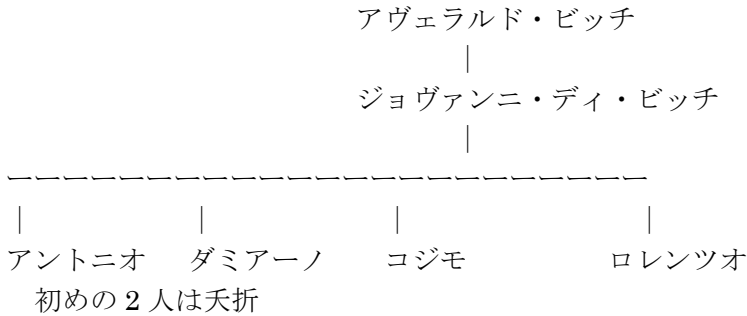
コジモは、フラ・アンジェリコ、パオロ・ウッチェロ、ブルネレスキに注文を出し、ドナテッロを気に入る。哲学を愛し、絵画・彫刻 建築を支援する。

老コジモ(1389 - 1464)が亡くなったとき、陰謀が起こされようとした。コジモ・イル・ヴェッキオのヴェッキオとは老を意味

する。息子ピエロのなくなる時も警戒された。

コジモは 1464 年 8 月 1 日に死し、花の聖堂で葬儀がされた。老コジモに庶子・長子ジョヴァンニがいた。そのジョヴァンニが 1 年前に死んだ。

フィレンツェでメディチ以外に有名なのは、パッツイ家、ソデリーニ家、ピッティ家、ネローニ家、バルディ家、アッチャイウオーリ家である。



ルネサンス学問の開始

フィレンツェ会議の後、フィレンツェへ、ヨハネス・ベッサリオン（1399 ? -1472）は残る。彼は東ローマ帝国の出身で、人文学者だ。正教会に属した。ニカイアの府主教だった。プレトンとともにフィレンツェ公会議を訪れた。合同賛成で、フィレンツェ会議後、カトリックに改宗し、その聖職者になる。1439 年に枢機卿になる。イタリアにプラトン哲学を教える。ベッサリオンは「プラトン注解」を出す。

コジモが作った人文主義サークルに、ギリシャ人哲学者プレトンが長になる。ゲオルギウス・ゲミストス・プレトン（1360 ? -1452）は、東ローマ帝国のプラトン学者。ミストラスの人、フィレンツェにしばしば滞在し、古代ギリシャ文明の復興を力強く主張

する。帰国する。プラトンは、コジモにフィレンツェでプラトン・アカデミーを作るべきだと考えさせた。

1453 年、東ローマ新しい時代に帝国が滅び、ギリシャの学者がイタリアに亡命した。彼らはコジモに歓迎された。コジモはフィチーノ（1433 - 99）にプラトン作品をラテン語に訳させた。彼は大学者になる。フィレンツェのプラトン・アカデミーができた。

コジモは、アテネ、コンスタンチノーブル、アレクサンドリアでの古典集めで、財産を投げ出す。フィレンツェ公会議以降、東の学者は、プラトン、アリストテレスを豊かに引用し、語るの、西の学者はびっくりする。プラトンかアリストテレスかの、大論争が起きる。フィレンツェではプラトンに熱中する。プラトン・アカデミーができる。フィチーノを主任にする。彼らはプラトンに熱中する。各地から人が来る。ビーコ・デ・ラ・ミランドラ、ミケランジェロも、メディチ家に集まった。

メンバーの 1 人は、アンジェロ・ポリツアーノ（1454 - 1494）で、詩人であり、「イーリアス」を訳した。ロレンツオの秘書になった。その長男ピエロの家庭教師にもなった。

マルシリオ・フィチーノは、1433 年、フィレンツェに近いフィッリーネ・ヴァルダルク村に生まれ、1450 年代にフィレンツェ大学で、論理学、自然哲学、人文科学を学んだ。哲学、医学、の教育も受ける。フィレンツェ大学といっても 1321 年創立のストウディウム・ゲネラーレである。彼はラテン語とギリシャ語をしっかりと学んだ、父はメディチ家の侍医・外科医であった。1456 年にギリシャ語を勉強しはじめた、プラトン哲学の原典を検討するためだった。

メディチの別荘がフィレンツェ近郊カレッジにあった。1462 年、コジモがフィチーノに、フィレンツェ近くのカレッジに家とプラトンのギリシャ語写本を与えた。この近辺の農地も買って、その地代で彼が生活できるようにした。この彼のプラトン・アカデミーは、友人たちのサークルだった。マルシリオ・フィチーノが古典

学で有名になり、チェスの名人マグリーノもコジモの援助をうけた。

フィチーノはフィレンツェのメディチ別邸で午前中は研究と翻訳をした。プラトン翻訳はコジモの「ヘルメス文書」入手で中断された。「ヘルメス文書」の翻訳を先にしてくれと、コジモが頼んだからである。かれは、魔術思想、神秘思想を研究した。

1463年、フィチーノはヘルメス文書の翻訳を完成した、ラテン語訳であり、「ピマンデル」という表題であった。それからプラトン対話編を訳した。プラトンのラテン語訳 10 編ができて、コジモの死の直前にフィチーノはそれらを読み上げた。コジモが 1464年に死す。その印刷はその後である。1469年以前にプラトン翻訳を完了した。1469 - 74年に、「プラトン神学」を書いた。フィチーノの学問はルネサンス期の新プラトン主義とされる。

フィチーノの名著が、『プラトン神学』（1474年筆）である。ここで彼は霊魂不滅説を出す。『愛について』（1475年筆）で彼は、プラトンの愛を論じ唱えた、これは神への愛だが、後年誤解された。フィチーノはキリスト教とプラトン神学とが調和しているとした。他に、『三重の生』、『キリスト教について』がある。

彼は占星術に深い知識を持った。彼は、プラトン、プロティノス、ゾロアスター、聖アウグスティヌス、ヘルメスを学んだ。若い時には、スコラ主義、アリストテレスをしっかりと学んだし、トマス・アクイナスも学んだ。

フィチーノは自分の作品の幾つかをトスカーナ語で書き直した。

フィチーノは 1473 年終わりにフィレンツェ大聖堂の司祭になる。彼はキリスト教に十分な津師記をもち、正統派信仰者であった。最後にフィレンツェ大聖堂の参事会員になる。1484 年以降、プロティノスを翻訳、注解し、1492 年に印刷した。フィチーノは 1494 年、メディチ家追放で引退した。1499 年に死す。彼の思想は 18 世紀まで影響を与えた。

教皇もルネサンス芸術家を保護した。ビザンチンから逃げた学

者がルネサンスの種をまいた。

『ヘルメス文書』

コジモ・ディ・メディチが待ち望んだ書、ヘルメス・トリスメギストスの「ヘルメス文書」は、B.C. 1 – A.D. 3世紀に書かれた。

最大の錬金術書であるとされるが、どうだろうか。著者はその始祖で、複数の著者だったとされる。この名は、3倍偉大なヘルメスという意味で、ヘルメスは、ギリシャ神話の神で、ゼウスの子、旅人、商人の守護神で、多面的な性悪をもつ。

エジプトのトート神とギリシャ神話のヘルメスが合体してヘルメス・トリスメギストスになったとされ、伝説的なエジプトの賢者である。

12世紀ころから錬金術と結びつけられ、ヘルメスは錬金術師の守護者で、学問や技芸の祖である、となった。

ヘルメス主義は、ヘレニズム文化の代表で、B.C. 3世紀ころからエジプトのアレクサンドリアを中心に発生した宗教である。『ヘルメス文書』はアレクサンドリアを中心としたエジプトの神官・学者が作り出したものであり、宗教的著作である。

コジモ・ディ・メディチが、プラトンよりもこちらに興味をもったのは、この書が錬金術の書だと聞いたので、早く読みたかったわけであろうか。ちなみにコジモは収書家であり、大枚を払って書を手に入れるという噂がヨーロッパ中で広まっていたので、東ローマの人は彼に速く売りつけたのであろう。

ヘルメス文書は、ヘレニズム時代にエジプトを中心に流布された文書群で、11世紀ころまでに東ローマ帝国で17冊の文書に編集された「ヘルメス選集」が中心で、中世ヨーロッパでは知られていなかった。これ以外で、ヘルメスの著作とされる「アスクレピオス」があり、早くからラテン語化され、知られていた。20世紀にナグ・ハマディ写本が発券され、そこにヘルメス文書の一部

がある。

「ヘルメス選集」は、コジモ・ディ・メディチが 1460 年に入手した。柴田有は、ヘルメス文書を4つに大別した。1, 哲学・宗教的な作品。2, 占星術の作品。3, 錬金術の作品。4、魔術の作品 (25) と。

ヘルメス主義は、親宇宙的であり、キリスト教と矛盾しない。グノーシス主義は反宇宙的であり、創造主の否定につながる。

錬金術の原典としてのヘルメス文書から訳出されたのが「アスクレピオス」や「ポイマンドレース」で、当時の人々によって争って読まれた。ちなみにアスクレピオスはギリシャ神話に登場する名医である。ポイマンドレースはヘルメスである。

エジプトの知恵の神トートとヘルメスが同一視された。ヘルメス・トリスメギストスという賢者または神が、アスラムヒロウス、タト、という弟子に知恵を伝授する。

ヘルメス文書のうち、主要な1つは「ヘルメス選集」である。『ヘルメス選集』の内容は、

1, ヘルメス・トリスメギストス (=ポイマンドレース) と求道者との対話 で、内容は、1、幻、ポイマンドレスの出現、2、啓示、3、宣教、4、 頌栄。

2, トリスメギストスとアスクレーピオス (ここでは弟子) との対話。

1, 場所、2、神。3 ヘルメスの教え。宇宙の形成。宇宙の解消・更新。4 ヘルメスとタト (ここでは弟子) との対話。

1 神・世界・人間にかんする通話、2、著者の見解、叡智、世界。3、神すなわち「一なるもの」

5 ヘルメスから子タトへ。

1, 不明なる神がもつとも鮮明なこと。2、神の認識と「叡智の眼」、3、神の表象、4、神の内在と超越、5、賛美、神人合一の体験。

6 アスクレーピオスに対する導師の独白。

善は神のうちにのみあり、ほかにはどこにもないこと。

1、善、2、美と善について。その認識。

7 導師の独白。神に対する無知が人間で最大の悪であること。

1, 人間の現状としての無知。2, 人間の目標としての知識、3, 無知からの脱出

8 導師と求道者との対話。存在するものは何一つ消滅しないのに、迷妄の輩は変化を消滅とか死と呼んでいること。

1, 死は実在しない、2, 論証。

9 導師とアスクレーピオスとの対話。

1, 人間における知性と感性。2, 世界における感性と知性、3, 神における感性と知性、4, 結論。

10 ヘルメストリスメギストスとタトとの対話。

1, 3つの存在、2, 叡智論。

11 ヌースからヘルメストリスメギストスへ。

1, 万有と神、2, ヌースの教え、3, 結論

12 ヘルメストリスメギストスからタトへ、普遍的叡智について。

1, 叡智論。2, 神の認識

13 ヘルメストリスメギストスが山上で子タトに語った秘められた教え、再生と沈黙の誓いについて。

1, 再生前の教え、2, 再生、3, 再生後の教え、4, 頌栄、5, 奥義に関する沈黙の誓い。

14 ヘルメストリスメギストスからアスクレーピオスへあてた書簡。

1, 序、2, 創造者と被造物の関係、3, 一切は「二つ」に尽きること。

15 欠

16 アンモーン王にあてたアスクレーピオスの解義、一神、質量、運命、太陽、叡智の本質、神の本質、人間、統一的構成、7つの星座、像にかたどられた人間。

17 タトと王との対話。

非体は体において見られる

18 雄弁家の演説。身体を受動の下に阻害されている魂。

1, 導入、2, 本題。

コジモ・ディ・メディチは、本書を入手して、ラテン語化させて、読んでみて、満足したのだろうか。『ヘルメス選集』は、柴田が分類するうちの、1, 哲学・宗教的な作品にすぎないからである。『ヘルメス選集』がきっかけになったとは思えないが、ルネサンスの時代に、占星術、錬金術、魔術の研究が進んだ。

まとめ

12世紀ルネサンスはルネサンスの前史になったかもしれないが、ルネサンスそのものではない。東西キリスト教の合同の公会議がフィレンツェのサンタマリア・ノヴェッラで開かれ、ここから、瓢箪から駒のようにして、ルネサンスの諸潮流の幾つかが生まれた。ルネサンスの初めの人的プロモーターは、美術と建築の点ではコジモ・ディ・メディチであった。

- (1) モンタネリ、ジェルヴァーゾ『ルネサンスの歴史』上・下 中公文庫、昭和60年。
- (2) アルノルフォ・ディ・カンピオ (c.1245-1302 または c.1310) は、フィレンツェの彫刻家、サンタ・マリア・デル・フィオーレやサンタ・クロッチェ聖堂を設計した。1280年ころまでフィレンツェ随一の工匠だった。
- (3) 英語、ドイツ語の表現。天文学・幾何学の書。
- (4) ガレノス (c.129 - c.200)。ペルガモン生まれ、ギリシャの医学者、古代医学の集大成をした。解剖し、皇帝医にもなった。ヒポクラテスの医学を伝えた。生き

た動物、豚、猿、山羊、犬を使って解剖し、臨床実験をした。瀉血を主張した。医書をギリシャ語で書いた。これは東ローマ帝国に伝わり、盛んになる。その後、ササン朝ペルシャへ広まった。それがラテン語になった。16世紀まで西洋医学を支配した。打破したのがヴェサリウスである。

- (5) 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫
ハスキンス『十二世紀ルネサンス』みすず書房
- (6) ネストリウス派の存在と意義は大きかった。ネストリウスは、キリストは人でもあるとする。キリストは神だとするアタナシウスとその派と対立する。だがアタナシウス派が勝利して、カトリックの教義となる。中世を作ったゲルマン諸民族は初めネストリウス派が多かった。その後、改宗するのである。
- (7) 伊藤俊太郎「12世紀ルネサンス」講談社
- (8) フリートリヒ2世。神聖ローマ帝国皇帝。1194 - 1250。ホーエンシュタウフェン家の皇帝。第15代。在位1220 - 1250。シチリア王を兼ねる。
- (9) ちなみに煉獄は、カトリックの考えで、死と天国との間にあり、多くの人びとがいる。天国にも地獄にも行けなかった人々がいる。しかし苦罰によって罪を清められ、天国に行ける。
- (10) ヴェルギリウス Publius Vergilius Maro, BC. 70-19。北イタリア、マントア（今のマントーヴァ）、アンデース生まれ、ローマ市民の子。クレモナ、ミラノ、ローマへ BC. 53 - 52 に移り、教育を受ける。コルネリウス・ガルススと友になる。主にネアーポリスに住む。生涯めとらず、プリディシウムで死。作 BC. 37「詩選」,39「農耕詩」,「アエネーイス」。
- (11) バーバラ・ルイス『ダンテ』岩波書店。ボッカチオの

伝記あり。ブルーニのダンテ伝。ホームズ『ダンテ』教文社。

- (12) クリステラー『イタリア・ルネッサンスの哲学者』みすず書房 1993年。邦訳書は、岩波文庫で四作ある。「カンツオニエーレ」は、名古屋大学出版である。日本の研究家は近藤恒一、
- (13) 研究者オヴェットは パリ生誕説、ピッラーノヴィチの研究はこれを打ち砕き、チェルタルドとした。ブランカは、フィレンツェ説を出す。
- (14) フィリッポ・ヴィルラーニの伝記「文豪の世界 5 ボッカチオ」タイム ライフ ブックス 昭和 45 年版。オヴェット『評伝 ボッカチオ』新評論。オペレッタ「ボッカチオ」スッペ作曲。(永竹由幸『オペレッタ名曲百科』音楽之友社、に解説あり)
- (15) 岩波文庫、1981年。先に、『フィレンツェの人々』日本評論社、世界古典文庫、3冊。
- (16) 翻訳、論創社、2017年、これはラテン語で書かれた。
- (17) ジョン・ウイクリフ (c.1320 - 1384)。イングランドの初期宗教改革者。
- (18) ヨハンネス・フス (c.1367 - 1415)。チェコの初期宗教改革者。ウイクリフの影響を受ける。チェコの国民的英雄。
- (19) マルティヌス5世教皇 在位 1417 - 1431、西欧キリスト教内での教会大分裂の解消後に教皇に選出された。ローマの名門コロナ家の出。

メディチ家は教皇ヨハンネス23世を支援した。ローマ教皇庁の財務管理者だった。そこでマルティヌス5世教皇もメディチ家を信任した。1424年彼はメディチ家当主ジョヴァンニ・ディ・ピッチに伯爵位を与えようとした。だが断られた。西欧キリスト教内の教

会大分裂が終ったが、英仏百年戦争、フス戦争、新公会議の3つの問題があった。フス問題について言えば、ボヘミア王ヴェンツェルがフス派を庇護していた。そこで1418年から教皇はヴェンツェルに圧力をかけ、フス派弾圧を始めた。1419年にヴェンツェルがなくなり、反フスの弟ジギスムンドが継承し、それを認めないフス派が蜂起した。最後に、公会議の招集はうまくゆかず、結局、バーゼルでの開催が決まった。

- (20) エウゲニウス4世（1431ー1447）は、バーゼル公会議の時期のローマ教皇で、ヴェネチア出身である。伯父教皇のひき立てで出世した。コンスタンツ公会議に出席した。マルティヌス5世の後任である。穏健フス派を1438年に承認し、問題が解決した。東ローマ皇帝ヨハネス8世パレオロゴスが対オスマン帝国への十字軍を呼びかけて貰おうと、ヨーロッパを訪問し、合同会議の機運が生まれ、1438年にエウゲニウスはフェラーラに会議の場を移した。コジモによりフィレンツェに移され、合同の公会議が行われ、東西教会の合同、教皇首位説が話された。1445年に閉会した。エウゲニウス4世は、コジモがスフォルツァ家と結んだ事で激怒した。
- (21) フス派。フスの影響下のひとびと、主にチェコとポーランドに勢力を拡大した。フスの火刑にあって1415年に亡くなった後、カトリックの圧力に会い、戦争になる。
- (22) オスマン帝国。イスラーム教の帝国、オスマンを祖とし、強大な帝国を作り、20世紀まで続く。
- (23) アルド・タルクイーニ監修『サンタ・マリア・ノヴェッラ』Firenze, n.d.
- (24) ウィンスピア、p.7

(25) 『ヘルメス文書』朝日出版社 1995年版

フィレンツェ文献一部

ウインスピーア『フィレンツェ』Firenze n d。

宮下孝晴『フィレンツェ美術散歩』新潮社。

メアリ・マッカーシー『フィレンツェの石』。

佐藤幸三『図説 ボッティチェリの都フィレンツェ』新潮社 1998年。

塩野七生『銀色のフィレンツェ』朝日文庫。

森田義之『フィレンツェ・ルネッサンス 55の至宝』新潮社。

ブラッカー『ルネッサンス都市フィレンツェ』岩波書店 2011年。

若桑みどり『フィレンツェ』文春文庫 1994年。

若桑みどり『フィレンツェ』講談社学術文庫 2012年。

中島浩郎『図説 フィレンツェ』新潮社。

パオルッチ、スカリーニ『フィレンツェ大図鑑』西村書店。

マキアヴェリ『フィレンツェ史』上下、岩波文庫 2012年、ちくま学芸文庫。

高階秀爾『フィレンツェ』中公新書 1966年。

近藤剛夫『フィレンツェ 美を求める旅』。

ヘレンガ『フィレンツェ幻書行』扶桑社。

『宮下孝晴とゆく隠れた珠玉の作品に出会う旅 フィレンツェ・トスカーナ編』。

森田義之『フィレンツェ・ルネサンス 三巨匠 レオナルド・ダ・ヴィンチ ミケランジェロ ラファエロ』。

グイッチャルディーニ『フィレンツェ名門貴族の処世術』講談社 1998年。

同 『イタリア史』

朽見行雄『フィレンツェの職人たち』。

ララチッタ『ローマ フィレンツェ』。

金沢百枝『イタリア古寺巡礼』新潮社 2011年。

バレストラッチ『フィレンツェの傭兵隊長ジョン・ホーンウッド』白水社 2006年。

池上俊一『フィレンツェ』岩波新書 2018年。

古沢千恵『とっておきのフィレンツェ・トスカーナ』筑摩書房 2015年。

『フィレンツェ・ルネッサンス』全6巻, 日本放送協会。

クリストファー・ヒバート『フィレンツェ』上、原書房 1999年。

R.W.B.ルイス『フィレンツェに抱かれて』中央公論 1999年。

グイッチャルディーニ『フィレンツェの盛期』

グイッチャルディーニ『フィレンツェ』

グイッチャルディーニ『フィレンツェ史』太陽出版 2006年

『フィレンツェ』Roma Florence n.d.

メディチ

森田義之『メディチ家』講談社現代新書 1999年

マッシモ・ウィンスピア『メディチ家』Firenze 2000年

雨宮紀子『メディチ家』世界文化社 2011年

中田耕治『メディチ家の人びと』講談社 1987年

松本典昭『メディチ宮廷のプロパガンダ美術』ミネルヴァ書房 2015年

金原瑞人『メディチ家の紋章』上下

ヒバート『メディチ家』リプロポート 1984年

ヒバート『メディチ家の盛衰』東洋書林 上下、2000年

中島浩郎『図説 メディチ家』新潮社

ベック『メディチ家の世紀』白水社

『メディチ家の至宝』東京都庭園美術館 2016年

西藤洋『神からの借財人 コジモ・ディ・メディチ』法政大学出版

シモネッタ『ロレンツォ・ディ・メディチ暗殺』早川書房

フィッチーノの作品

フィッチーノ『「ピレポス」注解。人間の最高善について』国文社 1995年

フィッチーノ『恋の形而上学』国文社 1985年

フィッチーノの研究書

シヤステル『ルネッサンス精神の深層』ちくま学芸文庫、

ウオーカー『イタリア・ルネッサンスの靈魂論』三元社。

クリステラー『イタリア・ルネッサンスの哲学者』みすず書房 1993年

研究論文、「プラトン神学への誘い」（『明治学院大学 キリスト教研究所紀要』31）

「マルシリオ・フィッチーノにおける愛の問題」（北海道大学『哲学』17）

ルネッサンス文献

ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス画人伝』白水社 1982年

ジョルジョ・ヴァザーリ『続 ルネサンス画人伝』白水社 1995年

ジョルジョ・ヴァザーリ『ルネサンス彫刻家建築家列伝』白水社 2008年

ブルクハルト『イタリア・ルネッサンスの文化』中央公論

ハウイジンハ『中世の秋』中央公論社 昭和50年

羽仁五郎『ミケルアンジェロ』岩波新書

ウオーカー『ルネサンスの魔術思想』ちくま学芸文庫

澤井繁夫『ユートピアの憂鬱』海鳴社

澤井繁夫『ルネサンスの知と魔術』山川出版

澤井繁夫『ルネサンス文化と科学』山川出版 1996年

澤井繁夫『魔術と錬金術』ちくま学芸文庫

澤井繁夫『イタリア・ルネッサンス』講談社 2001年

大塚金之助『解放思想史の人々』岩波書店 1945年

チェッリーニ『チェッリーニ自伝』岩波文庫 1993年
モーリー『魔術と占星術』白水社
『ルネサンスの神秘思想』講談社学術文庫
デッラ・ポルタ『自然魔術』青土社 1990年
野田又夫『ルネサンスの思想家たち』岩波新書 1972年
清水広一郎『ルネサンスの偉大と頹廢』岩波新書
西本晃一『ルネッサンス史』東大出版 2015年
平川裕弘『中世の四季ーダンテとその周辺』
ロス・キング『天才建築家ブルネレスキ』東京書籍 2002年
高橋友子『捨児たちのルネッサンス』名古屋大学出版 2000年
清水広一郎『中世イタリアの商人の世界』平凡社新書 1982年
イリス・オリゴ『プラートの商人』 1997年
『ラントウィッチの日記』
シャステル『ローマ劫掠』筑摩書房
エレナ・カプレッティ『イタリア巨匠美術館』西村書店 2011年
藤沢道郎『物語 イタリアの歴史』中公新書 2005年
藤沢道郎『物語 イタリアの歴史 I I』中公新書 2004年
『イタリア史』山川出版 2011年
モンタネリ、ジェルヴァーリ『ルネサンスの歴史』上下、中央公論 1985年
マルテェロ・シモネッタ『ロレンツォ・ディ・メディチの暗殺』
アイザックソン『レオナルド・ダ・ヴィンチ』上下 文芸春秋
2019年
アートレイ、ら『ダヴィンチ全記録』日経ナショナルジオグラフィック 2013年
野上素一『ダンテ』清水書院 1996年
塩野七生『ルネッサンスとは何であったのか』新潮社
バルバラ・ダイムリング『ボッティチェリ』Koeln 2005年
ブレデカンブら『ボッティチェリ<プリマヴェーラ>』

D・P・ウーカー『ルネサンスの魔術思想』平凡社 1933年
ブロカッチ『イタリア人民の歴史』1, 2, 未来社 1984年
グイッチャルディーニ『イタリア史』1, 2, 3

小説 辻邦夫『春の戴冠』4冊、中公文庫。

ヴェルディのオペラ 「エルナーニ」

ジュッゼッペ・ヴェルディ (Giuseppe Verdi, 1813-1901) は、イタリアのロマン派オペラを代表する作曲家である。おそらくイタリア最高のオペラ作曲家である。私は、オペラ作曲家としては彼が世界一だと思っている。彼は、パロマ王国のある寒村ロンゴレで、田舎宿の子として生まれた。そこは当時、ナポレオンの支配下にあった。その後、再びオーストリアの支配下になった。ウィーン会議で決められたのであった。イタリアは、ナポリとサルディニア以外はオーストリア支配となるのである。

ヴェルディは幼少から楽才を認められ、ブセートとミラノで音楽を学んだ。ヴェルディの初期のオペラの1つは、25才で作曲した「オベルト」であり、スカラ座で上演された。1842年に「ナブッコ」を作曲し、これは、ユダヤ人を題材にした民族解放のオペラだった。1843年に「十字軍のロンバルディア人」、1844年に「エルナーニ」、1847年に「アッティラ」を作曲する。1849年のオペラ「レニャーノの戦い」は、かつてのドイツ対イタリアの民族戦争を扱った。神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ1世（ドイツ王）のイタリア侵攻を、1176年に、ロンバルディア都市同盟がレニャーノで破った史実を題材とした。これは、北イタリアのオーストリアに対する独立運動の風潮に投じて成功した。上演された時、熱狂的な反応を引き起こした。

1848年のヨーロッパ革命はイタリアにも広がった。ミラノはオーストリア軍を撤退させた。ヴェネチアは共和国を宣言した。その後、ローマ共和国も成立した。ヴェルディは革命の指導者マツィーニに、賛歌「ラッパの響き」を作曲して送った。その後、各地の反乱が失敗に終わり、再びオーストリアが戻って来た。それに対し、リソルジメント（復興）運動が起きる。1851年初演の「リゴレット」で、ヴェルディは名声を得る。これは、オーストリアの検閲が、共和主義的だと反対したので、場面をフランスからイタリアへ、国王を公爵に、題名を「呪い」から「リゴレット」へ変えたものである。リゴレットは道化役である。ユーゴの「王様ご乱行」をもとにしている。1853年の「イル・トロヴァトーレ」、1853年の「椿姫」（「ラ・トラヴィアータ」）で、彼は名声を確立した。「椿姫」は、小デュマの有名な物語を題材にした。1855年に「シチリア島の夕べの祈り」を作曲する。これは13世紀フランス支配下のシチリア島の暴虐への反乱と恋の物語である。57年に、「シモン・ポッカネグラ」を作曲する。これはイタリア統一構想を持っていた中世ジェノアの統領の物語である。ヴェルディは1861年、カヴール(1)の推挙で第一回イタリア国民議会の議員に選ばれ、65年まで、音楽と演劇の改革に尽力した。レセップス(1805-94)がスエズ運河を1869年に開通させ、スエズ運河開通の祝賀のためにエジプトのカイロで初演された「アイーダ」(1871年)で、ヴェルディは彼の芸術の頂点に達した。その後、ワーグナーの楽劇の影響による、シェークスピアの「オテロ」(1884年)、シェークスピアの「ウィンザーの陽気な女房たち」による喜劇「ファルスタッフ」(1893年)で、新境地を開いた。その他、1792年のスウェーデン国王グスタフ3世の暗殺事件を扱う1859年初演の「仮面舞踏会」、1862年初演の「運命の力」、1867年初演の、シラー原作の「ドン・カルロス」――これの主人公は、フェリペ2世の息子である――、シェークスピアによる「マクベス」がある。オペラではないが、イタリアの国民的大作家アレッサンド

ロ・マンゾーニの一周忌のために作曲した「レクイエム」は有名である。ヴェルディの音楽は、リソルジメント（＝復興、イタリア解放運動）の勇士たちを激励した。またヴェルディの字は、イタリア王ヴィットリオ・エマヌエレの頭文字を連ねたものと同じであった。1859年、ピエモンテ王国の宰相カヴールはロンバルディアからオーストリアを追放した。そして北部・中部のイタリア、そしてパルマ公国もピエモンテ王国と統一をきめるのだった。ピエモンテ国王ヴィットリオ・エマヌエレは、1866年、普・戦争に乗じてヴェネチアを、1870年の普仏戦争に乗じてローマを獲得し、統一されたイタリアの国王になる。

この劇「エルナーニ」の作家は、ヴィクトル・ユーゴー（1802-85）である。19世紀フランスの大詩人、作家である。ユーゴーは、「東方詩集」、「ノートルダム・ド・パリ」、「レ・ミゼラブル」で、有名である。1830年、ユーゴーの劇「エルナーニ」（Hernani）が、パリのコメディイ・フラセーズ座で初演された。これは事件と言われ、ここで、フランス古典劇の時代が、ロマン主義への時代になった(2)。ロマン主義とは、文学芸術における解放運動であり、あらゆる束縛からの人間解放を唱った。

オペラ「エルナーニ」（Ernani、邦訳 中公文庫）は、ヴェルディ作曲の、彼の初期のロマン的歌劇であり、台本は、ヴィクトル・ユーゴーの戯曲で、ピアール・ヴェ（フランチェスコ・マリア・ピアール・ヴェ、1810・1876）の台本である。イタリア語である。作曲年は、1843年から44年で、初演が1844年である。

登場人物

エルナーニ	テノール	貴族、盗賊
エルヴィーラ	ソプラノ	
スペイン大公シルヴァ	バス	
カスティリアの王子、後に国王、ドン・カルロス、神聖ローマ帝国皇帝カール5世		バス

このオペラは、日本ではあまり知られていない。私がいつも参照する『歌劇大鑑』(3)にも入っていない。そこで少し紹介する必要がある。

これは、スペイン大公のドン・シルヴァ (バス) の姪・エルヴィラ (ソプラノ) をめぐり、カスティリアの王子ドン・カルロス (バス)、それを父の仇としてつけねらうエルナーニことアラゴンのドン・ファン (テノール)、それにドン・シルヴァがおりなす三重の人間模様を描いた作品、である。かつてロンドンでパバロッチが演じた。主要曲は、「芝生に光る露のごとく」(Come rugiada al cespite. テノール)、「おお恋する心を君に」(O tu che l'alma adora. テノール)、「不幸な人よ」(Infelice. バス)、「カスティリアの獅子を目覚めしめよ」(Si ridesti di leon di Castiglia. コーラス)、「エルナーニよ、一緒に逃げて」(Ernani, Ernani involami. ソプラノ) である。

ストーリーは、ポリグラム社=デッカ・レコード・ロンドンのCDにあるジャン=クロード・ボアイエの文の翻訳によれば、こうである。

第1部

セゴヴィア公爵だった父親をスペイン国王ドン・カルロの父親に殺されたアラゴンの貴族ドン・ファンは、復讐のために盗賊となり、国王の使者に追われている。アラゴンの山中に逃れた彼は、エルナーニという名で、国王に反する賊の長になった。エルナーニは、美しいドンナ・エルヴィーラを愛し、彼女も盗賊の長である彼を愛している。だがエルヴィーラは、年老いたドン・ルイ・ゴメス・デ・シルヴァ公と婚約している身。そのうえ国王ドン・カルロまでもが、彼女に恋をしている。

シルヴァ公の城。夜もふけ、ドンナ・エルヴィーラはひとり、寝室で休んでいる。エルナーニの合図を真似てエルヴィーラの寝

室に潜り込んだドン・カルロは、そこで彼女に熱烈な愛の告白をする。しかし拒絶され、王は力づくでエルヴィーラをものにしようとする。そこへ秘密の扉からエルナーニが現れる。エルナーニと国王が激しく言い争っているところへ、シルヴァ公が登場。シルヴァは、目の前の男が国王であることに気づかず、二人の誘惑者に決闘を申し込む。すると国王が身分を証し、新しい皇帝を選ぶにあたってシルヴァ公の意見を聞きに来たのだと伝え、自身で復讐の手を下すべくエルナーニを逃してやる。

第2部

エルナーニが死んだという噂を信じてしまったドンナ・エルヴィーラは、シルヴァ公との結婚に同意する。結婚式の前日、華やかなお祝いの準備が整いつつある。シルヴァ公の城に、国王の兵に追われたエルナーニが、巡礼姿に変装してやって来る。エルヴィーラの結婚を知ったエルナーニは、シルヴァ公に身分を明かし、愛する女性のない人生など無意味だと言って、国王に身柄を引き渡すよう求める。だがシルヴァ公は、客人を守るという騎士道精神に従い、自分の兵を挙げてまでエルナーニを城にかくまおうとする。衛兵に命令を出して部屋に戻ったシルヴァ公は、エルナーニの腕に抱かれるエルヴィーラの姿を目にする。その瞬間、国王が兵を引き連れて城に入ってくる。シルヴァ公は、ふたりに怒りをぶつけることができないまま、エルヴィーラに部屋に戻るよう命じ、エルナーニを秘密の部屋にかくす。エルナーニの引渡しを求める国王の命令に応じないシルヴァ公に対し、国王は処刑を宣告する。だがそこへエルヴィーラがかけつけ、慈悲を求める。心動かされた王は、シルヴァ公をその場で殺すことを思いとどまるが、人質としてエルヴィーラを連れ去る。

国王たちが去ると、シルヴァ公はエルナーニに決闘を申し込む。しかしエルナーニは断わる。そして国王がエルヴィーラを恋していることをシルヴァ公に明かし、「ふたりで彼女を救いだし、その

後で決闘に応じよう」と提案する。そして自分の狩りのラップを手渡し、これが鳴ったら自害すると誓う。

第3部

シルヴァ公は国王への反逆を画策している。カール大帝の墓があるエクス・ラ・シャペルで国王暗殺の計画が話し合われる。国王を殺す人間を選ぶくじが引かれ、エルナーニが選ばれる。

だが暗殺計画のことを知った国王が、集会の場所と時間を探りだして、前もってカール大帝の墓の中に隠れていた、そのとき、ドン・カルロが皇帝に選ばれたことを告げる祝砲が鳴り、国王ドン・カルロは皆の前に姿を現す。驚くシルヴァ公たちは、一瞬カール大帝の幽霊を前にしたような錯覚にとらわれる。新皇帝カール5世の誕生を祝う人々が墓地を一気に埋め尽くす。

エルナーニは自分の本当の身分を明かし、国王を殺そうとした他の貴族たちとともに死なせてほしいと求める。しかし必死に許しを乞うエルヴィーラの姿、そして皇帝としての新しい出発を恩赦で飾りたいという思いもあり、全員を許し、エルナーニに貴族の身分を返し、エルヴィーラとの結婚を認める。

第4部

エルヴィーラとエルナーニの結婚式。アラゴンのエルナーニの城では、ふたりの結婚を祝う仮面舞踏会が開かれている。エルナーニへの復讐心を捨てられないシルヴァ公が、城の森に隠れて、愛し合うふたりがテラスに姿を現すのを待っている。そして、ふたりが最高の幸せを味わっているその瞬間、運命の狩りのラップを吹く。誇り高い騎士であるエルナーニは、騎士道に背くことができず、残酷な老人とエルヴィーラの目の前で約束どおり自害する。絶望したエルヴィーラは気を失い、エルナーニの遺体の上に倒れる。

国立オペラで当日売っていたパンフレット Wiener Staatsoper / Verdi・Ernani によると、「エルナーニ あらすじ」(S. 94 - 95) はこうである。前出のストーリーと微妙に違う所もある。

第一幕 誘拐者

エルナーニは絶望していた。彼は父も土地も社会的地位も失い、残されたのはエルヴィラに対する愛だけである。ところがエルヴィラの後見人ドン・シルヴァは、姪である彼女と結婚するつもりである。思い余ったエルナーニは、エルヴィラを誘拐しようと思心する。

シルヴァの城の一室で、エルヴィラはエルナーニに救い出されることを切望している。国王ドン・カルロスもエルヴィラに思いを寄せ、彼女の前に登場。強い態度で求愛する。エルヴィラが決然と拒否しているところへ、エルナーニが現われ、自らの不運の原因である国王と向い合う。そこへシルヴァもやってくるが、中の一人が国王だとは気付かず、名誉を守るためと称して二人に決闘を申し込む。すると国王は正体を明かし、皇帝選挙に関しシルヴァと話し合うために訪れたと告げ、シルヴァのエルナーニに対する怒りをそらす、内心では、いずれエルナーニに復讐しようと考えている。

第二幕 来訪者

エルナーニが亡くなったという噂を耳にして、エルヴィラも遂にシルヴァとの結婚を承諾する。婚礼当日、城では祝宴が繰り広げられる。国王の軍勢から追跡されたエルナーニは、巡礼に変装してシルヴァの城に現れ、来訪者に対する正当なもてなしを要求する。

だが、エルヴィラがシルヴァと結婚することを知ったエルナーニは、正体を明かし、シルヴァに対し彼を国王の軍勢に引き渡すよう要求する。最愛の人を失って生きるよりは死を選ぶというの

が彼の真情である。

だが来訪者に対するもてなしを神聖な義務とするシルヴァは、軍勢からエルナーニを守るため、城の防備を固める。準備を終えて戻ったシルヴァは、エルヴィラとエルナーニが抱き合っているのを見て激怒するが、そこへ国王の軍勢が到着して事態は急変する。シルヴァは、エルヴィラに自室へ戻るよう言い渡し、エルナーニを秘密の部屋へ隠す。国王はエルナーニ引渡しを要求するが、客人の身を保護するのは城主の当然の義務であるとして、シルヴァはこれを拒む。腹を立てた国王は兵士に命じてシルヴァを殺すと脅かすが、そこへエルヴィラが現れて慈悲を嘆願する。カルロスはエルヴィラを人質にすることを決める。打ちひしがれたシルヴァは、自らの愛は放棄できてもエルナーニを引き渡すことは出来ないと言ひ、国王はエルヴィラを連れ去る。

国王が去ると即刻、シルヴァはエルナーニを連れだし決闘を挑む。エルナーニがこれを拒否するとシルヴァは、国王もエルヴィラを愛していることを告げる。これを聞いたエルナーニは、当面の敵であるカルロスに対し盟約を結び、エルヴィラを救出した後は生死をシルヴァに委ねようと申し出る。彼は所持品の角笛を渡し、その音が聞こえたときには自ら命を絶つと誓う。

第三幕 皇帝の慈悲

カルロスはカール大帝の霊廟で、彼の命を狙う謀反者を待ち伏せている。来し方を振り返って人生のはかなさを思う彼は、神聖ローマ皇帝に選ばれた暁には、カール大帝の偉大な業績を手本にしようと歌う。謀反者が登場し、カルロスは身を隠す。国王暗殺者を選ぶためくじが引かれ、エルナーニが当りくじを引いたため、シルヴァは腹を立てる。

物陰からカルロスが登場、彼らはカール大帝の霊が現れたと思ひ驚く。そこへ選帝侯が登場、カールV世が皇帝に選ばれたことを告げる。エルナーニは、自分がセゴビアおよびカルドーニャの

公爵、アラゴンのドン・ファンであることを名乗り、他の二人と運命を共にすることを申し出る。だが新皇帝は、治世の始めを善行で飾りたいと考え、エルヴィラの必死の嘆願を聞き入れて全員を釈放し、エルナーニに土地を返すとともに、エルヴィラとの結婚を承諾する。

第四幕

エルヴィラとエルナーニは婚礼を祝い、宮殿で豪華な仮面舞踏会を催す。だが庭に潜むドン・シルヴァは、二人がテラスに現れるのを待ち受けている。2人が登場して喜びを歌うと、シルヴァは運命の角笛を吹き鳴らす。エルナーニは騎士としての誓いを守るため、剣で自らを刺す。老シルヴァが冷酷に見守る前で、絶望したエルヴィラはエルナーニの亡骸に身を投げ出す。

以上、2つの文で私は読点を補っている。ここでいうカルロス、上の文ではカルロ、つまりカール5世は、ハプスブルク家のカール5世である。史書では名君とされ、スペインのフェリペ2世の父である。

私は、1999年9月1日、ウィーン国立オペラで、ヴェルディの「エルナーニ」を見た。新しいシーズンの開幕の日であった。この日、エルナーニを Neil Shicoff、ドン・カルロを Carlo Alvarez、デ・シルヴァを Roberto Scandiuzzi、エルヴィラを Maria Guleghina が演じた。非常によかった。主役たちの声量があった。とくにヒロインがそうであった。音楽＝オーケストラも上手だった。また昔にくらべ、舞台と装置が近代的になった。ウィーンの国立オペラは伝統的に、当時のままに再現しようとしていたのだった(4)。始まりも8時からとなり、20分前に入場となる。このオペラは長いので、パウゼ＝休憩は計2回だった。

1999年9月3日、『ディ・プレッセ』Die Presse. S. 27. に、次の記事が出た。

「厚紙での盗賊気質

ヴェルディの「エルナーニ」が、ウィーン国立オペラの新しいシーズンを開き、舞台上、素敵さと幾つかの革新を周囲に知らせしめた。

まとまってはいない(5)！ 国立オペラはヴェルディの「エルナーニ」を 1999/2000 年のシーズンの開幕の出し物に選び、この際、音楽的には知られた形式で示された。それに対してオペラ観衆は、音楽ドラマの出来事をめぐり、革新を期待している。国立オペラは新しい、プラカードは、たとえあまり目につかない外観をえても、もう別のものだ。プログラムのちらしは、優雅に飾られ、それでもほんの少しはまさに進歩だ。おみやげスタンドは、マルモア・ザールからリヒャルト・ワグナー・サロンへ移った。座席案内者の制服は深い黒になり、優雅な金モールによって飾られた。そしていたるところ鉄のどん帳に珍しいオペラのタイトルを全シーズン中、見て楽しむことができる。

水曜日に、同じく、リチャード・ハドソンの灰色の紙デザインの中で、グラハム・ヴィックスのこの「エルナーニ」のための、粗野な、歩き・立ち・膝まずきを考えたことを楽しむことができた。しかしなんととっても、この華麗な、初期のヴェルディ作品を演じ、そのために目下最善の可能性の歌手の配役を持てた。そのことは、もちろん、ベルカントの成功が終わりではないことを、意味しない。

それでもナイル・シコフ（エルナーニ役ー引用者）は、大いに強烈さを出し、声楽上美しい状態で示された。ロベルト・スカンディッチはそれと並んでシルヴァ役としてその高貴なバスで輝いた、そしてカルロ・アルヴァレスは、たとえちょっと単調だとしても、優雅にドン・カルロスを作った。エルヴィーラ役としてマリア・グレギーナは特に、この人々がどれほど水準が高いかを、

今や大いに明らかにした。オーケストラ・ボックスで、フレデリク・シャスリンは、小沢の稽古によって華麗になっている音楽士たちを、立派に調整した。それに対しコーラスは、夏には新鮮だったが、たやすく、いい加減な日常へ戻った。」

この記事の標題で、「厚紙での」とあるが、舞台装置が厚紙で作られているからだろう。

ここで小沢の名を出しているのが興味深い。小沢征爾は、1998年にウィーン国立オペラ座の指揮者になった。1998・1999年のシーズンで、「エルナーニ」の初演は1998年12月14日であった（上記パンフレット、96ページ）。その時の指揮者は、小沢征爾であった。だが1999年9月1日の「エルナーニ」には、小沢は指揮者として載っていない（当日のしおり）。その代わりに、フレデリク・シャスリンが音楽指導者として挙げられている。つまり小沢が稽古をつけていて、それに従って演奏したのだ。新聞ではそういう意味を言っている。ここで出て来る、グラハム・ヴィックスは演出、リチャード・ハドソンは衣装、を担当した。

- (1) カブール (1810-61)。貴族。新聞「リソルジメント」を発刊。議員になり、1850年入閣、1852年に首相。1859年、オーストリアからの独立戦争に勝利する。
- (2) 『フランス文学案内』岩波文庫 133ページ。
- (3) 太田黒元雄『歌劇大鑑』上下、音楽之友社。
- (4) 拙書『ウィーンの森の物語』（NHKブックス）で言及した。
- (5) 原語は *ausgegliedert* である。だが、そういう印象はなかった。

ミラノの歴史

ミラノは、ローマ帝国の時代に、一時首都になった。コンスタンティヌス（後の大帝、当時、西方正帝）とリキニウス（当時、東方正帝）が連名で出した、キリスト教を認めるミラノ勅令（313年）で有名である。

北イタリアとミラノは、フランク王国に属した。ここが、神聖ローマ帝国になったので、16世紀から神聖ローマ帝国に属した。ついでスペイン・ハプスブルク家の統治下に入った。18世紀に、オーストリア・ハプスブルク家に帰属した。

ナポレオンが1796年にオーストリアをミラノから追い出したが、ナポレオンの没落後、1815年に再びロンバルディア・ヴェネチア王国としてオーストリア・ハプスブルク家に戻され、支配された。オーストリアではミラノをマイラントという。

19世紀ヨーロッパ大陸の最大事件・1848年の革命は、ミラノの煙草工場（ハプスブルク家経営）の一揆から始まった。革命が終わってから後であるが、1859年にソルフェリーノの戦いで、ミラノはオーストリア・ハプスブルクから離脱した。ミラノはイタリア統一運動の中心地にもなった。

このイタリア独立運動は、サルデーニア王国（イタリア北西部）を中心とし、ロンバルディ（旧ミラノ公国、イタリア北東部）がサルデーニア王国に併合された。この時ミラノはイタリア王国の中に入った。一方、独立派のジュゼッペ・ガリバルディが、シチリア王国に上陸し、両シチリア王国（シチリア島と南イタリア）を征服した。こうして1861年に、イタリア王国が建国され、1866年にヴェネチアが、70年にローマ教皇領などが併合した。

ナポリの政治史

B.C. 7世紀ころ、ギリシャ人が建設したネアポリスがナポリの起

源である。その後、多くのギリシャ都市がイタリアで作られた。紀元前 202 年に南イタリア全体がローマ国の支配下に入った。79 年にヴェスヴィオ山の大噴火が起きている。476 年に西ローマ帝国が滅亡した。その後、5 世紀に、ヴァンダル族とゴート族が侵入する。東ゴート族が 493 年からイタリアを支配する。535 年から、ビザンツ軍がイタリア半島で東ゴート族と戦う。つまり東ローマ帝国のユスティニアヌス帝の再征服を受けた。

その後、568 年にランゴバルト族が南イタリアを領有する。661 年にナポリは公国となる。9 世紀初から中ばにイスラム教徒がイタリア南部を侵攻する。

1139 年にナポリはノルマン人のシチリア王に降伏する。1140 年にノルマン人に支配され、ノルマン王ルッジェーロ 2 世がナポリ湾に卵城を作り、要塞とした。ルッジェーロ 2 世のあとをグリエルモ 1 世らがついだが、その後シチリア王家で子孫が途絶え、1194 年にホーエンシュタウフェン家のハインリヒ 6 世・シチリア王に支配された。1198 年には同家のフェデリコ 2 世に継承され支配された。フェデリコ 2 世は 1224 年にナポリ大学を作った。役人養成のためだった、

1250 年にフェデリコ 2 世が病没し、これでホーエンシュタウフェン家が断絶し、フランスのシャルル・ダンジュー(注)が 1266 - 68 年に南イタリアとシチリア王位を取った。つまりローマ教皇によりシチリア王に封ぜられ、そして戦争により南イタリアを手に入れた。彼は首都をパレルモからナポリに移した。ここからナポリ王国と呼ばれるようになった。アンジュー家が来た時、1282 年にカステル・ヌオーヴォが着工された。5 年で竣工した。この 1282 年にシチリアの晩鐘事件でアンジュー家はシチリアを失い、ナポリだけを支配した。アラゴン王ペドロ 3 世がシチリアを取る。シチリア王国は 2 つに別れたわけだ。ナポリでは 1309 年に、3 代目ロベルトがナポリ王になった。14 世紀初、ナポリ大聖堂が完成した。これはかつてシチリア王シャルル 1 世によって建設を命じられていたものである。1382 年ドラッツォがナポリ王になった。1435 年にアンジュー家が断絶し、1442 年にスペイン・アラゴン家が

継ぐ。このトラスタマラ家のアルフォンソ5世はシチリア王でもあったが、アルフォンソ1世として1443年ナポリに入城し、ナポリ王になった。2つの王国の王になったのだ。この年、彼は文芸サロンを作り、それはナポリ大学の始まりだった。1479年にアラゴン家とカスティリア家が合同したので、それがスペイン王国となる。1480年に1年間、イタリアの南部の一部がオスマン帝国に占領された。アルフォンソはナポリで長く統治した。1458年にこの王が死し、私生児のドン・フェランテがフェルディナント1世としてナポリ王位を継ぐ。

しかしフランスのシャルル8世がこれにつけ込み、ナポリを武力占領することになる。彼が1494年にイタリアに攻めてきた。フィレンツェ、ローマと進軍し、1495年にナポリに入城した。このフランス兵が略奪したので、ナポリ市民に敵意をもたれた。さらに、ローマ教皇、ヴェネチア共和国、ミラノ公国、神聖ローマ帝国皇帝、スペインのフェルナンド5世が、反フランスの同盟を結成したので、シャルル8世は一部を遺し、やむなく帰国する。多くの美術品と、書物、そして梅毒を持ち帰った。

1504年からスペインがナポリを支配した。スペインの大司令官ゴンサロ・デ・ゴルドバは1503年にナポリを占領し、フランス軍を追い出し、最初のスペイン総督になった。た。スペイン・アラゴン家は1504年にナポリ王宮を作った。1503 - 1707年はスペインが南イタリアを属国化した。1534年からトルコ海賊が南イタリアを攻めてきた。1647年、マザニエッロによるナポリの貧民の暴動が起きた。彼はメルカート広場で処刑された。1504年からのスペイン支配体制は、1713年にオーストリア・ハプスブルク家領に替わった。1707 - 34年、南イタリアはオーストリアに統治される。つまり、スペイン継承戦争中にオーストリア・ハプスブルク軍が1707年にナポリに入城し、スペイン総督が追い払われた。オーストリア支配は1734年まで続く。

1733年にポーランド継承戦争が起きて、1734年からスペイン・ブルボンのカルロ3世つまりパルマ公ドン・カルロスがナポリに入城し、1735年にカルロス7世としてナポリ王として即位し、オーストリアからナポリを奪った。彼はシチリアも得た。こうしてスペイン支配に戻った。その24年の治世で評判がよかった。1752

年にカルロス7世はナポリ郊外に巨大な王宮を建設し始め、カゼルタ宮殿である。建造には28年かかり、経済的波及効果が抜群であった。1759年、カルロスは、息子のフェルディナントに王位を譲った。

1798年にフランス軍が侵攻し、このブルボン王はナポリを追放され、シチリアへ逃れた。1806年から14年まで、ナポレオンの兄ジョセフ、その後妹婿ミュラがナポリ王になった。ナポレオン体制が壊れると、1815年にブルボン家が復位し、フェルディナントが帰り咲いた。両シチリア王国が再生した。

1821年、ロスチャイルド家は四男カール(1877-1855)をナポリに送った。この年オーストリア軍がナポリを占領したので、好機と見た兄ロスチャイルドが弟を送ったのである。カールはフランクフルトで銀行業を学んでおり、両シチリア王国で銀行を立ち上げ、ナポリの主要銀行にした。彼の後を二男が継いだ。1901年まで銀行は続いた。

1830-69年はフェルディナント2世の時代であった。リソルジメント運動の中で、1860年にガリバルディ軍がナポリを征服し、両シチリア王国が滅び、1861年、サヴォイア家の統一イタリア王国に編入される。ナポリの政治はめまぐるしい。

その後はイタリア全土の歴史と共に歩み、第1次大戦に参加し、またファシズム時代を経る。第2次大戦中、ナポリ市民はドイツ軍を駆逐した。

ナポリ出身の有名人には、ベルニーニ、ブルーノ、ヴィーコ、カルーソーがいる。

(注) アンジュー家。フランスの王家カペー家の支流。フランス王ルイ9世の弟シャルルが1247年にアンジュー伯になり、1246年にプロヴァンス伯になり、1266年にシチリア王になった、この時、南イタリアを得た。シャルルはその後、シチリアを失うが、ナポリ王にとどまる。アンジューはフランス西北部の1州。

